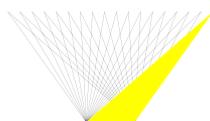


文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業（コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）



「日本の演劇」
未来プロジェクト

2022

CONTENTS

代表理事挨拶	01
「日本の演劇」未来プロジェクト 概要	02
「日本の演劇」未来プロジェクト2022 報告会レポート	04
参加団体インタビュー	
阪急電鉄株式会社（宝塚歌劇）	06
株式会社アミューズ	08
エイベックス・エンタテインメント株式会社	10
株式会社ヴィレッヂ	12
劇団四季（四季株式会社）	14
株式会社キョードーファクトリー	16
株式会社新歌舞伎座	18
松竹株式会社	20
株式会社ネルケプランニング	22
株式会社博多座	24
株式会社御園座	26
株式会社東急文化村	28
株式会社ホリプロ	30
株式会社梅田芸術劇場	32
株式会社パルコ	34
株式会社キューブ	36
東宝株式会社	38
株式会社明治座	40
「日本の演劇」未来プロジェクト 対象公演のツアー日程	42
各地からアーティストが集う『東京キャラバン』×「日本の演劇」未来プロジェクト	44
一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク	46

2020年から始まったコロナ禍において、演劇を含むライブエンターテインメントの世界では、計り知れないほどの数の公演が失われ、それ以前は着実に勢いを増し、今後の隆盛もますます期待されていた業界は、一転して甚大なダメージを受け、事業の継続に大きな驚りがさすに至りました。演劇は、スタッフの熱意が創り上げ、磨かれたキャストの技によって演じられ、お客様の熱いご期待があって、はじめて熱気に包まれる公演が上演できますが、この公演そのものを失った劇場は、一介の箱と化し、劇場が培った経済の連鎖は断ち切られて、製作そして興行に携わってきた全ての人々の生活も重大な危機に瀕することとなりました。

この中で、二年目を迎えた「日本の演劇」未来プロジェクトは、その名が表す通り、こうして苦しむ演劇の未来に大きなサポートを与え、製作には先行投資が必要な業界の特性をしっかりと支える一つの柱となりました。この報告書は、この結果として、全国13地域での、質の高い大規模な26作品を、不自由な生活を強いられる状況の中でも、その「生きる糧」として、舞台公演を求める皆様のもとへお届けした記録です。ご覧いただく際に、本プロジェクト実施の陰にある復興を願う演劇関係者の熱い想いも併せてお汲み取りいただけます。誠に幸いと存じます。

東宝株式会社 常務執行役員 演劇担当
池田篤郎

コロナでもただでは起きぬ

コロナ禍が勃発して三年が過ぎた。演劇界においては、「病気としてのコロナ禍」以上に「コロナ禍下における開幕、上演」の方で、ただならぬ苦労があった。その中で、舞台を愛する思いと思いが繋がり、演劇界では大きなネットワークが出来上がった。そしてコロナ禍そのものが次第におさまっていくと同時に、今度は、その横の繋がりを、ただコロナ禍を乗り越えるためだけでなく、さらに前向きにポジティブに広げて行こうという動きが出てきた。これを「コロナでもただでは起きぬ」精神と呼ぶ（ことにしよう）。この「日本の演劇」未来プロジェクトも、明らかにそのコロナ禍があって生まれた前向きの産物だ。コロナ禍から「起き上がろうとする」七転び八起き精神が生んだプロジェクトだ。私は、このプロジェクトがさらに大きな動きとなり、日本にまだ存在したことの無い、定期的、周期的な「(国際)芸術祭」にでもなりはしないかと、夢想妄想しております。今はまだそんな夢は誇大妄想的な響きにしか聞こえませんが、この三年間コロナ禍によって失われた私たちの夢を、三年分取り戻すためにも、未来に向かうプロジェクトというのは、これからさらに大きな意味を持ってくと信じております。

劇作家・演出家・役者
野田秀樹

コロナ禍は、劇場に人を集めて舞台芸術を鑑賞していただくという、我々の業界の「一丁目一番地」を襲いました。歴史を振り返ってみても、これほど大きな災厄はなかったかもしれません。この三年間、我々は正に存続をかけて、苦しい戦いを続けて参りました。一方、この戦いの中では、新しいアイデアや工夫によって、これまでにない、意義ある企画が幾つか誕生しました。その一つが「日本の演劇」未来プロジェクトであったと思います。今でもいろいろな方々から、都市部から距離が離れるほど新型コロナウイルスへの恐怖感が強くなり、観客動員に苦勞すると伺っています。この傾向は、どの舞台芸術にも共通して生じていたことだと思います。ですので、このアートキャラバン事業に、日本全国で上演された様々な公演が含まれていたことには大きな意義があったと言えるでしょう。これはコロナ禍からの脱出のためだけでなく、各地の更なる文化振興のためにも意義深いことだったと思います。

苦渋のコロナ禍をもがき続けた記録であるこの報告書を通して、日本全国の劇場がそれぞれに輝きを取り戻し、お客様の笑顔で包まれる日々の、その「貴重さ」に思いを馳せていただければ幸いです。

劇団四季 代表取締役社長
吉田智誉樹

「日本の演劇」 未来プロジェクト

「日本の演劇」未来プロジェクトは、文化庁 統括団体によるアートキャラバン事業（コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）において大規模公演型事業として採択された事業です。この事業は、新型コロナウイルスの繰り返される感染再拡大により委縮した文化芸術活動への関心と意欲を取り戻し地域の需要を喚起することを目的に、2021年度より実施している事業です。2021年度は公益財団法人日本演劇興行協会との共同事業として「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」として実施し、2022年度は当ネットワークが法人格を得たことにより一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワークとして申請を行い採択を受けることができました。

我が国を代表する舞台創造団体がコロナ禍においても力強く結集し、安心安全に「劇場の灯」を灯し続けるために、全国16の地域で61作品もの公演を「日本の演劇」未来プロジェクトとして上演して参りました。

本事業への参加団体の選考にあたっては、ネットワーク正会員を対象に、2020年2月28日～2022年1月31日の期間で舞台芸術公演における実損額が6億円以上に及ぶ法人であることを条件とし、また実損額の割合に応じてその補助額を決定いたしました。地域の文化芸術振興の推進という観点から、首都圏以外における地域のバランスなども鑑みて開催地の調整を行うことでバラエティに富んだ作品のラインナップになりました。また今年度は多様な舞台芸術関係者が集う「東京キャラバン the 2nd」をアートキャラバンの象徴と位置づけた広報事業として実施いたしました。さらには総括的なシンポジウム、若手プロデューサーのネットワーク構築などの連携事業も行い、コロナ後を見据えた舞台芸術界の再興への未来像を世界に向けて発信することを狙いといたしました。

本書は2022年度に実施された「日本の演劇」未来プロジェクト2022の成果を事業者ごとのインタビューを軸にまとめたものです。新型コロナウイルスの世界的流行という緊急事態に直面した私たちの新たな「連帯」が生んだ当ネットワークが、長期化するコロナ禍においてなおいっそう深めたその繋がり（絆）は、世代を超えて劇場に力強くあたたかな灯を灯し続けるための礎になるものと確信しています。

2022年 実施概要

令和3年度補正予算 文化芸術振興費補助金 統括団体によるアートキャラバン事業（コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）

【事業期間】2022年1月1日～2023年1月31日

【公演数】30作品／261公演 ※一部公演中止に伴い、申請時より10公演減

【上演地域】宮城、栃木、群馬、東京、神奈川、静岡、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡、沖縄

【採択額】499,000,000円

【動員数】206,348名

【公演団体（初日順）】

阪急電鉄株式会社（宝塚歌劇）、株式会社アミューズ、エイベックス・エンタテインメント株式会社、株式会社ヴィレッジ、四季株式会社、株式会社キョードーファクトリー、株式会社新歌舞伎座、松竹株式会社、株式会社ネルケプランニング、株式会社博多座、株式会社御園座、株式会社東急文化村、株式会社ホリプロ、株式会社梅田芸術劇場、株式会社パルコ、株式会社キューブ、東宝株式会社、株式会社明治座

【事業内容】

- ・日本を代表する団体が全国で質の高い大規模公演を実施し、文化芸術の重要性や魅力を届ける
- ・ポストコロナを見据えた舞台芸術界の未来像を発信することを目的としたシンポジウムを実施する
- ・舞台芸術フェスティバルの国際発信を思索する結節点として「東京キャラバン the 2nd」と連携する

主催：一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク

2021年 実施概要

令和2年度補正予算 文化芸術振興費補助金 大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業

【事業期間】2021年7月1日～2022年1月31日

【公演数】31作品／320公演

【上演地域】宮城、東京、埼玉、神奈川、千葉、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡、滋賀、福井

【採択額】100,000,000円

【動員数】240,552名

【公演団体（初日順）】

阪急電鉄株式会社（宝塚歌劇）、株式会社ネルケプランニング、株式会社梅田芸術劇場、株式会社ホリプロ、株式会社キューブ、株式会社ヴィレッジ、四季株式会社、株式会社アミューズ、東宝株式会社、株式会社新歌舞伎座、株式会社パルコ、株式会社キョードーファクトリー、株式会社御園座、エイベックス・エンタテインメント株式会社、松竹株式会社、株式会社東急文化村、株式会社明治座、株式会社博多座

【事業内容】

- ・全国20地域で質の高い大規模な31作品を、アートキャラバンとして実施し、多くの方に文化芸術の重要性や魅力を届ける
- ・EPAD事業と連携して、希望する作品の舞台映像を最新技術（8K＋ドルビーアトモス）を活用して収録・アーカイブする
- ・収録した作品の一部を上映会にて紹介し、舞台芸術の映像化とアーカイブを「新しい演劇の生態系」として発信する
- ・アートキャラバンに参加する各社が相互に観劇を行うなど、有機的なつながりを持ち、精神的に連携できる状態を作る

主催：公益社団法人日本演劇興行協会、緊急事態舞台芸術ネットワーク

Symposium

「日本の演劇」未来プロジェクト2022 報告会

日時: 2023年1月27日(金) 17:00~18:00 | 会場: 明治座食堂

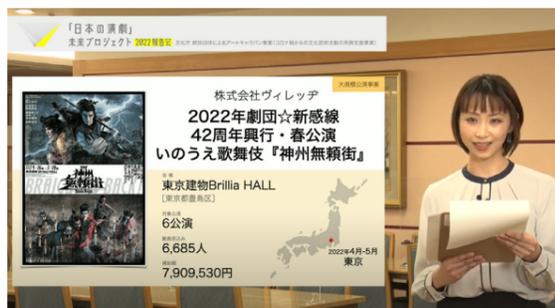
新型コロナウイルス感染第8波が広がる1月27日、「日本の演劇」未来プロジェクト2022報告会をオンライン配信にて開催しました。報告会では、舞台芸術を広く届ける広報事業や、横の繋がりを創出するネットワーキング事業、未来プロジェクトに参画した18社の公演の様子を紹介し、1月以降の取組みを振り返ります。

冒頭の映像は、明治座の入口から。エスカレーターと階段をのぼり、会場となる4階の食堂へと入っていく。

実際に会場に訪れたような臨場感で、報告会はスタートしました。



会場である明治座入口



文化庁参事官(芸術文化担当)の山田素子氏からは「新型コロナウイルスの影響により文化芸術の活動が大変萎縮してしまったなかで、文化芸術の重要性、魅力を全国に発信するとともに、コロナ後を見据えた文化芸術業界の可能性ということでご健勝いただきました。(略)。本報告会を契機といたしまして舞台芸術関係者のなかで業界の輪が広がって、演劇業界全体のますますのご発展に繋がるとを期待しています。文化庁としても文化芸術のいっそうの振興のため、引き続きさまざまな政策を推進していく所存でございます」とご挨拶がありました。

まず、各18企業30作品の紹介ののち、1年間に実施した「広報事業」と「ネットワーキング事業」について報告がありました。「広報事業」では、コロナ禍において舞台芸術を広く届けることを目的とした『東京キャラバン』(2022年12月16~17日)、シンポジウム(7月25日~8月1日)を開催。「ネットワーキング事業」では、企業や団体を越えた横の繋がりの創出をめざした「相互観劇事業」や「シン・つながりプロジェクト」を実施。それぞれについての報告を紹介がありました。(※各事業の詳細は、P5~を参照)

参加18企業からは「アートキャラバンの補助金は公演にとってとてもありがたいものでした。また補助金以外の様々な取組みも、業界の連帯感のきっかけになりました。今年インバウンドの規制がゆるやかになったばかりの時期に、販売期間が1週間程度にも関わらず数十名の海外のお客様にご来場いただいたことに驚きと嬉しさがあり、元気と勇気をいただきました」(株式会社ネルケプランニング)などの声がありました。事務局の担当者も「コロナ前であればコールアンドレスポンスをしていた作品も「拍手を一緒にしましよ

う」[「演者さんと一緒に動いてみましょう」と様々な対策をしながら、上演をそこなわずに行おうとされていることがとても素敵でした」]「舞台上で上演して、お客様の反応があって初めてすべてが完成するものなんだと改めて感じた」と、並走していくなかでの実感が語られます。

緊急事態舞台芸術ネットワーク事務局長の伊藤達哉からは、この2022年度を振り返り、「公演中止を2回繰り返して再演にこぎつけたなど、各公演の紹介を聞いていて涙が出てきていた。先週も第8波の中で70ステージが中止に追い込まれています。演劇人にとってとんでもないことです。コロナ前は「とにかく幕を開け続けるんだ」という思いでやっていた演劇人たちが、一つひとつの中止にどれだけ苦渋の決断をして、どれだけのキャストやスタッフが涙のみ、主催者が金銭的な負担を追い、そしてお客さん達が大きな期待を裏切られているかを忘れてはいけません。そんななかでも、今回の補助金のもとにこれだけの公演が成り立っていることに感謝するとともに、我々自身で未来をつくっていきたい」と決意を述べました。

最後に、小規模団体(劇団)からも「もし来年以降も事業が続くようであれば、小規模な団体以外も参加できる枠があると嬉しいです」とコメントが寄せられました。それについて事務局より「この事業は「大規模公演型」という枠組みで、コロナ禍で実損額が大きい事業者を対象に展開してきました。来年度も継続するのであれば、公募要項次第ではありますが、小規模団体や地域となにかできないかと内部で企画立案をしています」と締めくくり、舞台芸術の未来を広く見据える姿勢を示しました。

参加団体インタビュー

INTERVIEW

阪急電鉄株式会社（宝塚歌劇）



対象公演

宝塚歌劇花組全国ツアー公演『フィレンツェに燃える』『Fashionable Empire』

2022年10月21日～23日 | 神奈川県横浜市 | 神奈川県民ホール
2022年11月1日～3日 | 愛知県名古屋市 | 日本特殊陶業市民会館 フォレストホール

宝塚歌劇星組全国ツアー公演『モンテ・クリスト伯 / Gran Cantante!!』

2022年9月16日～21日 | 神奈川県相模原市 | 相模女子大学グリーンホール

宝塚歌劇雪組宝塚バウホール公演『Sweet Little Rock 'n' Roll』

2022年1月14日～25日 | 兵庫県宝塚市 | 宝塚バウホール

宝塚歌劇星組宝塚バウホール公演『ベアタ・ベアトリクス』

2022年9月8日～19日 | 兵庫県宝塚市 | 宝塚バウホール

宝塚歌劇花組宝塚バウホール公演『殉情』

2022年10月13日～21日 | 兵庫県宝塚市 | 宝塚バウホール

100年以上の歴史を有し、女性だけの出演者で上演される宝塚歌劇。運営母体である阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇)は、鉄道事業とともに、エンタテインメントの分野において、宝塚歌劇の舞台公演のほか出版・放送・配信などのメディア事業にも力を入れている。宝塚歌劇の本拠地・宝塚大劇場の総支配人を務める栗原良明氏にコロナ禍以降の運営などについて伺った。

入社まで宝塚歌劇は未体験

— 今のお仕事に就かれたきっかけを教えてくださいませんか。

1990年に阪急電鉄に入社し、新入社員研修後、宝塚大劇場の団体セールスの部署に配属になり、その後、東京宝塚劇場などを経て今に至っています。実は会社に入るまで宝塚歌劇を観劇したことはありませんでした。

— いつ頃から舞台芸術にご興味をお持ちになりましたか？

1990年前後より様々な作品を観劇するようになりました。特に心に残っているのは90年代に一世を風靡した野田秀樹さんの「夢の遊眠社」や鴻上尚史さん率いる「第三舞台」の公演。中でも京都の南座で観た野田秀樹さん作・演出の『贗

作・桜の森の満開の下』(1989年)は大好きで、穂谷友子さんが演じられた夜長姫の素晴らしさが忘れられません。東京宝塚劇場で勤務していた頃は、PARCO劇場などにもよく伺っておりましたし、劇団四季は『キャッツ』大阪初演当時(1985年)からいろいろな舞台を拝見しています。

— お仕事をなさる上で1番の喜びややりがいは何でしょう？

観劇は事前にチケットを購入し、決められた時間に現地まで足をお運びいただいて初めて成立する、とても不慣れた娯楽。劇場中に響くお客様の拍手を体感する時間は今の仕事をする中で何物にも代えがたいです。宝塚大劇場の公演の最後は、大階段を出演者が下りてくるパレード。トップスターが大きな羽根を背負っている、皆さんが宝塚歌劇と言えば最初に想像される場面です。これをご覧

になっている客席の様子を、一番後ろから見ていると、この様子はここでしか見ることができないものだと、改めて感じます。また、宝塚歌劇の100年を超える歴史の中で、宝塚大劇場、東京宝塚劇場と、これまでに二度、大きな劇場の建て替え事業に携われたことも非常に貴重な経験でした。

出口が見えないコロナ禍の不安

— コロナ禍でいろいろなことが変わりました。

舞台芸術業界においては、2020年2月26日に政府から出された公演中止要請が大きな節目になったと思います。最初の緊急事態宣言後、やっと劇場を開けられるようになってからもしばらくは客席を50%しか使用できず、苦しい状況が続きました。劇場の仕事をする中で最もつらかったのは、はっきりとした見通しが立たず、国や自治体の要請も一進一退を繰り返していたことです。約2500席ある宝塚大劇場での公演が中止になれば経済的な打撃が大きいのは勿論ですが、それまで公演の準備で忙しくしていた毎日から、突然のお客様への公演中止の告知や、その後のチケット払い戻し等の手続きという、後ろ向きのことを繰り返す日々になりました。劇場運営側である私達もそういった状況でしたので、実際に舞台に立つ出演者や各作品スタッフも非常に大きな不安と戦っていたと思います。

— 「日本の演劇」未来プロジェクト対象公演での観客の反応など教えてください。

コロナ禍で公演を行うにあたり、劇場入り口での検温や手指の消毒など、ご来場の皆様には大変なご協力をいただいていると感じます。そういった状況の中、「こういう時期だからこそ宝塚歌劇を観て元気を貰いたい」との声をお客様より頂戴するのは大変ありがたく励みになります。未来プロジェクトには、宝塚大劇場・東京宝塚劇場以外で上演する公演で参画させていただきましたが、全国ツアーですと、開催地にお住いの、普段は宝塚歌劇をご覧いただいていないお客様にも足をお運びいただいていますので、このような中、観劇にいらしていただくからには、ご期待に添えるよう頑張ろうと全員で気持ちを引き締め臨みました。

創遊事業本部 歌劇事業部長 兼 宝塚総支配人 栗原良明(くりはら・よしあき)

1967年奈良県天理市生まれ。1990年3月神戸大学法学部卒業後、同年4月阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇)に入社。新入社員研修での鉄道現業勤務を経て、同年8月に宝塚大劇場の団体セールスの部署に配属になり、その後、東京宝塚劇場建替えの間の仮設劇場「TAKARAZUKA1000days劇場」の開業から運営、新しい東京宝塚劇場の立ち上げに従事。その後、梅田芸術劇場のリニューアルなどを担当し、2020年4月から現職。写真は、お気に入りアイテム。2022年10月にサービス開始した、宝塚歌劇公式アプリ「宝塚歌劇Pocket」のアイコンをピンバッジにしたもの(試作品)。

豊富なコンテンツの提供

— コロナ禍での宝塚歌劇の大きな強みが、舞台映像の放送や雑誌『歌劇』の発行等、豊富なコンテンツ提供だと感じます。

私達も宝塚歌劇を応援してくださる皆様との繋がりを改めて実感しています。劇場に足を運びたくても様々なご事情でそれが叶わないファンの方達から「劇場には行けなくても『歌劇』は変わらず愛読しています」「タカラヅカ・スカイ・ステージ」での舞台放送を楽しみに仕事を頑張っています」とのお声をいただく、平時とはまた違う絆が生まれているのだとありがたい気持ちになります。

— 今後の舞台芸術業界への希望や展望などお聞かせください。

1995年の阪神・淡路大震災では、兵庫県の宝塚大劇場が被災し、3ヶ月に渡って公演を中止しました。その危機から立ち上がる一つの方策として、舞台作品の映像化事業がスタートし、当時から蓄積された舞台映像収録技術のノウハウが、現在の「タカラヅカ・スカイ・ステージ」での放送や映画館でのライブビューイング、自宅で視聴できるライブ配信などにも生かされています。中でも配信は劇場での観劇や映画館でのライブビューイングと異なり、人数制限なく、気軽にご覧いただける方法ですので、新たな可能性を感じています。

今回、緊急事態舞台芸術ネットワークが立ち上がったことで、会社や団体・公演の規模の大小や、民間が公共かといった、これまで何となく存在していた仕切りのようなものが低くなった印象があります。コロナ禍が終息を迎えても、このネットワークで得た繋がりや関係性がより良い形で残り、新しい取組み・方向に発展していけば幸いです。逆境に負けず、劇場で良質な作品をお客様にお届けしていきたいとの思いは、どの団体や劇場でも同じだと思いますので。

【取材 2023年1月26日 / 文 上村由紀子】



Interview

株式会社 アミューズ



対象公演

ミュージカル『The View Upstairs - 君が見た、あの日 -』

2022年2月1日～13日 | 東京都新宿区 | 日本青年館ホール

再演、海外作品、新作など様々な舞台を手掛ける株式会社アミューズ。コロナ禍でもミュージカルを中心に毎年約7本を企画している。2022年2月の『The View Upstairs - 君が見た、あの日 -』では東京公演は実施したものの、24日から大阪公演中止など厳しい決断を迫られた。関詩織プロデューサーの視点から、現場の様子や判断などを振り返っていただく。

幼い頃からの観劇経験が原点

—— 演劇の仕事を始めた経緯は？

私が舞台を好きになったのには3つの段階があります。最初は、幼い頃に観た『セーラームーン』ミュージカル。今観てもかなり高いクオリティで作られているのですが、この作品が幼心に刺さり、舞台好きになりました。また、家族が劇団四季の「四季の会」会員だったこともあり、小学校低学年のときに『ライオンキング』や『レ・ミゼラブル』を観たこと。いわゆるグランドミュージカルの迫力やすごさを肌で感じました。『レミゼ』には上演のたびに劇場に足を運んでいて、舞台が人生のベースになったきっかけでした。そして高校生になって初めてニューヨークへ、『RENT』などを観て、

舞台の持つパワーを改めて感じましたね。自分も何かエネルギーやパワーを伝えられる物を作りたいと思うようになり、演劇の仕事に興味が出てきました。

進学した日本の大学は演劇とは関係のない学部でしたが、いざ就職を考えた時に、自分の中で「ブロードウェイミュージカルを作りたい！」という気持ちに気づいたんです。そして、日本の大学を卒業後、アメリカの大学に編入し、シアターアーツを学びました。アメリカの大学は最初は専門が分かれていないので、演技もやりますし、照明や音響といったオペレーションのほか、ステージマネージャーのことも勉強し、さらにはブロードウェイのプロデューサーのもとでインターンも経験しましたね。ただ、アメリカにいる間に、自分が日本人であることや、日本という国の良さを感じ、またアメリ

カで経験したことを日本の舞台に還元できたらいいなという思いも芽生えたので、帰国後現在のアミューズに入社しました。

対策を講じるも大阪公演は中止

—— コロナ禍でいろいろと影響があったと思います。現場をどのように捉えていますか？

演劇アートキャラバン事業に参加したミュージカル『The View Upstairs - 君が見た、あの日 -』も大阪公演が中止になってしまいました。弊社に限らない話かと思いますが、公演中止が相次ぎ、とても厳しい状況です。業界全体として、PCR検査をこまめに実施するほか、舞台稽古が始まるまでマスクをつけての稽古を徹底するなど、できる限りの感染予防対策を講じてきました。しかし、感染対策をする分、費用はかかりますし、それ以上にスタッフやキャストのコミュニケーション面での影響が出ているのかなと感じています。演出家のスタイルがそれぞれあるとは思いますが、コロナ禍前は、稽古後にご飯を食べにいたり、稽古場では話せないことを話したりする時間があって、その時間がとても大事なコミュニケーションになっていたと思うんです。でもそうした時間も今はとれないですから。

ただ、コロナ禍になってからリモートでいろいろなことができるようになったとは思いますが。オンラインをうまく活用するメンバーもいますし、稽古後の時間がない分、今まで以上に集中して皆が稽古に取り組んでいる感覚はあります。

—— 『The View Upstairs』の大阪公演中止の判断は、どのように決められましたか？

出演者が10人ほどと人数が少なかったため、他の作品と比べても「密」を回避する対策は立てやすく、稽古場ではパーティションで区切ったり、ソーシャルディスタンスを取ったり、マスク着用での稽古をしたり、通勤ラッシュ時間帯を避けた稽古時間を確保したりしていました。幸い、稽古期間中に体調不良になる方はいなかったのがよかったです。

ただ、大阪公演の直前に、新型コロナの陽性者が出てしまいました。その際、緊急事態舞台芸術ネットワークのおか

げで、「隔離すべき期間」や「症状の程度に応じた対応策」の最新情報が明確に分かっていましたし、素早く判断を下すことができました。

大阪公演を楽しみに待っていてくださった観客の皆さんには申し訳ない気持ちでいっぱいですが、私たちが公演中止は本当に残念です。ただ、コロナ禍ということで、東京公演期間中に配信と映像収録をしていたんですね。そこで、大阪で公演する予定だった期間中に改めてアーカイブ配信を企画したところ、かなりの反響をいただきました。また、著作権元からの許可をいただけたので、Blu-rayにも残すことができましたので、その点はよかったです。

日本の観客の「成長」を感じる

—— 舞台芸術業界のこれからについてどのように思われますか？

コロナ禍になり、いつ公演が中止するか分からないという状況に加えて、感染対策費や物価高の影響で年々チケット代も上がっていますから、作り手にとっても、お客様にとっても厳しい状況は続いています。

一方この状況下で、誤解を恐れずに言えば、観客も「成長」していると感じます。「推しの俳優が出てくるから観に行く」だけでなく、ちゃんといい作品を作らないと観に来てくれない。「とりあえず観よう」ではなく、作品性を吟味した上での観劇になっていると思うんです。これは作り手にとっては確かに厳しいことですが、上演前にきちんと作品の良さを伝える必要性をより感じますし、よりよい作品を作ろうというモチベーションになるはずです。業界としても「成長」し続けて、海外にも負けない作品をつくっていききたいです。また、せっかく出来たネットワークという横のつながりを生かして、海外のようにカンパニーの枠を超えて何かできるといいと思います。例えば子どもが観劇をできる日を設けたり、イベントを開催したりできたらいいですね。

[取材 2022年11月28日 / 文 五月女菜穂]

プロデューサー 関詩織 (せき・しおり)

1991年生まれ。慶應義塾大学文学部を卒業後、米国ニュージャージー州センチナリー大学シアターアーツ学部に入社、卒業後ブロードウェイプロデューサーの元でのアシスタント業務を経て、2016年株式会社アミューズに入社。携わった主な作品に、ミュージカル『黒執事』-Tango on the Campania (2017)、『怪人と探偵』(2019)、『キンキーブーツ』(2019、2022)、『ホイッスル・ダウン・ザ・ウィンド』(2020)、『フラッシュダンス』(2020)、『IN THE HEIGHTS』(2021)、『The View Upstairs - 君が見た、あの日 -』(2022)、『MEAN GIRLS』(2023) など。写真は仕事の必須アイテムとして愛用のiPad。カバーには過去公演のグッズステッカーも。



Interview

エイベックス・エンタテインメント株式会社



対象公演

『ライフ・イン・ザ・シアター』大阪公演

2022年3月19日～21日 | 大阪市北区 | サンケイホールブリーゼ

エイベックスグループに、本格的にシアター事業が立ち上がったのは2008年。以降、様々な舞台作品を世に送り出してきた。2022年度に上演した『ライフ・イン・ザ・シアター』は2人芝居のためコロナ禍で配慮する点が大所帯とは違うなど、今作ならではの取組みのほか、演劇制作にける思いをプロデューサーの都丸聡子氏に伺う。

ロビーに立つことが一番好き

—— 演劇になぜ興味を持たれたのですか？

小学2年生の時に、知り合いのお姉さんがいるからという理由で地元・群馬の演劇クラブに入ったことと、母に連れられ劇団四季を観て「なんて素敵な世界なんだ」と感激したことがきっかけです。演劇クラブには高校3年生まで所属し、大学受験のタイミングでこのまま俳優を目指すか悩みました。それで、演劇学科のある大学と一般的な大学の大学を両方受験し、両方合格して、ギリギリまで迷った結果、勇気が持たず、演劇学科ではない方に進学しました。大学は東京だったので、学生時代はずっと帝国劇場で案内係のアルバイトをしていました。卒業後は、芸能事務所で営業職に就いたのですが、やっぱり舞台を作る仕事をしたいという思いで転職し、天王洲銀河劇場の小屋付きの制作を経て、今に至ります。

—— プロデューサーの仕事で楽しいことは？

帝国劇場で案内係をしていた頃、お客様がよく「すごく良かったです。ありがとうございます」と声をかけてくださっていて、お客様がこんなふうに声をかけてくださるようなものを作るって素敵なことだと思っていた。今でも私はロビーに立って、お客様の声を聞くことが一番好きです。日々稽古をしていると、つい作ることに夢中になってしましますが、やはりゴール地点はお客様に観ていただくことなのだとも再認識できます。

初観劇作品になることができた

—— 『ライフ・イン・ザ・シアター』は二人芝居で、全国6カ所を巡りました。いかがでしたか？

キャストは二人だけということで、大所帯の会社よりは感染症にまつわる心配材料は少なかったのですが、逆にどちらかが倒れてしまったらどうにもできないという

リスクも抱えた公演でした。出演者の勝村政信さんと高杉真宙さんもかなり気をつけてくださっていたと思います。とにかく千秋楽まで駆け抜けたいという切なる思いでやっていたので、最終地の金沢で千秋楽を迎えられた時は喜びもひとしおでした。以前は習慣のように言っていた、開幕や千秋楽の「おめでとうございます」に、この3年で重みを感じるようになりましたね。

—— プロデューサーとして気をつけたことはありますか？

カンパニーの感染症対策はもちろんですが、万が一、自分自身が明日から仕事に行けなくなったとしても制作を続ける環境を作っておかなければと思うようになりました。だからなるべく情報を共有しておくといった対策は取るようにしていました。

一方で、出演者のお二人は芝居の中でもずっと会話をされていますので、稽古場で雑談をしないという制限は設けませんでした。稽古内外で、高杉さんは勝村さんから与えられるものすべてを吸収しようとされていましたし、勝村さんも惜しみなく注がれていました。その時間は芝居にも生きたように思います。

—— 劇場のロビーではどんなことを感じましたか？

若い世代のお客様も多く来場され、中には初めてお芝居を観るといふ方もたくさん来てくださっていました。演劇人として、お客様の新規開拓という意味でも嬉しかったですし、初観劇の方が「面白かった!」と話してくださっていたことも嬉しかったです。

—— 全国6カ所も巡る公演は最近では少ないですね。

東阪や東名阪までにとどまる作品が多い中、海を越えて札幌や福岡まで行くことができました。コロナ禍で、以前のように東京まで足を延ばせなくなったお客様もたくさんいらっしゃいますから、我々の方から行けたことはとても嬉しく、ありがたいことでした。今作はキャストや作品の魅力に加え、二人芝居というコンパクトさも全国の主催者様が呼んでくださった理由のひとつになったかもしれないと思っています。

劇場に来るきっかけを作りたい

—— コロナ禍は続っていますが、舞台芸術界のこれからについてどう思われていますか？

まず、緊急事態舞台芸術ネットワークの皆様が横の繋がりを示してくださったことはとても大きく、他社の皆様はライバルではないのだと思えましたし、そこに参加できて嬉しいです。情報を常にアップデートしていかなければいけない状況の中、ネットワーク内で共有していただいた情報を参考に社内でも議論ができたことも、感謝しています。

舞台芸術界のこれからについて考えると、私はいつも同じところに行き着くのですが、演劇が好きの人が一人でも増えてほしいです。例えば2.5次元というジャンルが生まれ、人気が高まり、演劇を観てこなかったお客様が劇場に来てくださるようになったことは、とても素敵なことだと思っています。劇場に来るきっかけはたくさんありますから、そのきっかけになれる作品を作りたいです。同様に、全国各地で上演できるような作品、全国の主催者様が「うちで上演したい」と思ってくださいような作品を作ることも大切だと思っています。それによって全国の方の演劇を観るきっかけになれば何よりですし、私自身が劇団四季の公演を観て「演劇っていいな」と思い、この世界に足を踏み入れたように、演劇人が増えていってほしいです。

—— ご自身は演劇を好きになって、どんな影響がありましたか？

舞台上で繰り広げられるいろいろな人物の人生や想いを観ることで、さまざまな感情を持てるようになったのではないかと思います。演劇を観たからといってダンスや歌がうまくなるわけではないですが(笑)、間違いなく心は豊かになる気がします。

[取材 2023年1月28日 / 文 中川實穂]

プロデューサー 都丸聡子(とまる・さとこ)

2014年に入社。アシスタント・プロデューサーとして、ミュージカル『モンティ・パイソンのSPAMALOT』featuring SPAM@やオフ・ブロードウェイミュージカル『Ordinary Days』などに携わりながら、『ライフ・イン・ザ・シアター』、斬劇『戦国BASARA』シリーズ、『タクフェス』シリーズなどのプロデュースを担当。また外部会社主催公演の制作業務なども担当している。



Interview

株式会社 ヴィレッチ



対象公演

2022年劇団☆新感線42周年興行・春公演 いのうえ歌舞伎『神州無頼街』

2022年4月26日～5月28日 | 東京都豊島区 | 東京建物Brillia HALL

株式会社ヴィレッチは、2020年春の『偽義経冥界歌』の福岡公演1ヶ月中止に続き、同年秋の『神州無頼街』では関係者全員のスケジュールを合わせ2年の延期を決定した。その間に、主演の福士蒼汰と宮野真守らをふくむ二人芝居・三人芝居をプロデュースする。観客に届けるために走り続けるその思いを、柴原智子社長に聞いた。

稽古場に突撃し、劇団員に

—— 演劇のお仕事に携わるきっかけはなんですか？

短大の被服科に通っていた時に、舞台美術や舞台衣装に興味を持ちました。当時はまだバブルで、同級生はどんどんアパレル企業の内定をもらってくる。でも私は2年生の時に衣裳家の緒方規矩子先生の舞台衣裳展を見に行き、洋服を扱う仕事でこんな世界があるんだと知りました。ちょうどその頃に、友達に「テレビで劇団☆新感線の舞台を録画したから見に来ない？」と誘われ、よくわからないまま見ると、時代劇なのに頭がクシャクシャで、着物であって着物でない。「なにこれ！面白い！」とものすごく驚きました。私も舞台衣装をやってみたいと思い教授に相談したら「一

回行ってこい」と言われ、新感線の大阪の稽古場に突撃訪問しました。劇団員の方々に、学校で作った洋服などの資料を見せると、古田新太さんや栗根まことさんやいのうえひでのりさんが面白がってくれ、翌週から通うようになったのが88年の夏ですね。それからは衣裳を担当しながら、学校に通い、バイトをし、そのうち制作が手薄になってきたのでわからないながら手を出すようになり、気づけば今に至ります。

公演中止、2年後の再演を誓って

—— 舞台制作の仕事のやりがいは？

やっぱり面白いものを観られることですよね。そして、お客様が「面白かったー！」と笑顔になってくださる。

劇場いっぱいのお客様が沸いてる様子を体感すると、良かったなという気持ちになります。

演劇の世界にはいろんな表現の仕方があり、いろんな方の思いがあり、一概にどれが一番良いなんて順位は付けられません。でもお芝居そのものの歴史はとても長くて、いまだに無くならない。ということは、これからもきっと無くならないでしょう。

—— 近年はコロナ禍で大きな影響があったと思います。制作としてはどのような思いでしたか？

「無くなってしまった興行をどうやったら取り返せるのか」という思いしかありませんでした。とくに全公演中止になった『偽義経冥界歌』福岡公演(2020年4月)は博多座の買い取り公演だったので、上演されないとお金にならない。けれど、小屋入りしてから中止が決まり、そうなるとお金が入らないことよりも、こんなに頑張ったお芝居を人に見てもらえない悔しさの方が強いです。いのうえが「とにかく通し稽古だけさせてくれ」と言い、博多座のスタッフの方々に客席に座っていただき、一度だけ舞台上で通しました。観ていると「ああ、もうこれが最後なんだ」と涙が出てきましたね。役者も泣きながら台詞を言っていて、芝居を取り上げられている悔しさが伝わりました。でも舞台はとても良くて、博多座の方々も割れんばかりの拍手を送ってくださり、劇場の外に吊るはずだったのぼりを客席にパーッと渡して。「こんな事は二度とあってほしくない。だから絶対に博多座でもう一回やるよ」と話しました。8月には『神州無頼街』の延期が決まり、2年後にスケジュールの調整ができたので、お客様に「帰ってくるから2年後に待っていて」と案内を出しました。それが今年やっと上演でき、感慨深かったですね。

全国に作品を届けるために

—— 『神州無頼街』は、大阪、富士、東京と3ヶ所でツアー公演を行いました。それぞれいかがでしたか？

大阪公演での幕開けでは「やっとデビューできるなあ」という気持ちでした。ただずっとコロナは付きまっていますし、大人数のカンパニーなのでどう感染対策をすればいいかを

考えながらの公演でしたね。本当は「やっただね！」と皆で乾杯をしたかったです。

大阪から東京公演まで1ヶ月空いていたので、劇団初の静岡県富士市での公演を追加しました。劇場の方々は仕込み期間が10日もあるような団体が来たのは初めてでびっくり驚かされていました。でも地元の方も多く観に来てくださり、満員御礼のなかで感動と興奮のカーテンコールをいただけたことは嬉しかったですね。そのままの勢いで最後の東京公演に臨むことができました。

東京公演の大千秋楽ではかつてないほど当日券の列が長く、200人ほどの方が並んでくださいました。それだけ求めてくださるお客様がいるんだと感動しましたね。評判を聞いて駆けつけてくださったり、もう一度観ようと足を運んでくださったりと、長く公演をしていくことの相乗効果もあったと思います。とはいえ大所帯ですからツアー公演は大変です。代わりではないですが、私達はいつも全国でライブビューイングを実施するので、離れた場所の方にも楽しんでいただけたら嬉しいです。

—— 続くコロナ禍で、舞台芸術業界のこれからについてどう思われますか？

私達のように会社化している劇団にとって、興行は仕事でもあります。でも表現をされている方の中には、あえて仕事にしていない方も、したくても仕事にできない方もいるでしょうから、「舞台芸術」と一口に言っても価値観もジャンルもまったく違いますよね。それでも文化やアートやお芝居って、気持ちの潤いを助けるものだと思います。我々が潤いを作って、それを心の糧にしてください。お客様がいる。「これであと半年頑張ります」という声を耳にすると、私達も頑張ろうと思えます。

もしコロナ禍で、国が芸術文化を支援をしてくれるのなら、実際の現場に当てはまる制度や助成を考えていただけるととてもありがたいですね。舞台芸術というのは、もう何千年と続いているジャンルなんですから。

[取材 2022年11月16日 / 文 河野桃子]

代表取締役社長 柴原智子(しばはら・ともこ)

大阪府出身。1988年7月より劇団☆新感線に関わる。当初、舞台衣裳家を目指し、衣裳として劇団に参加するも、株式会社ヴィレッチでのアルバイト期間に劇団の制作業務に携わり、人気が右肩上がりになっていく当時の劇団の状況から、1993年に社員として株式会社ヴィレッチに所属し、衣裳を断念し制作に専念することとなる。以後、劇団公演の制作はもとより、FCの運営、グラフィックの進行、マネージメントといった様々な業務を行い、プロデューサーとして劇団の運営を担っていきようになった。2013年に現職に就任し現在に至る。



劇団四季(四季株式会社)



対象公演

『リトルマーメイド』 静岡公演 / 仙台公演

2022年5月1日～6日 | 静岡市葵区
静岡市民文化会館大ホール
2022年12月1日～30日 | 宮城県仙台市
東京エレクトロンホール宮城

『ライオンキング』東京公演

2022年7月1日～7月31日
東京都江東区 | 有明四季劇場

劇団四季は2023年に創立70周年を迎える。国内に拠点となる7つの劇場を持ち、常にいくつかの作品の上演を行うなど、長年にわたり全国の老若男女に作品を届けてきた。コロナ禍には大打撃を受けたが、なお変わらず新たな挑戦を続ける。劇団四季の吉田智誉樹社長に、コロナ禍での取り組みや、舞台への思いなどについて伺った。

初めての舞台出演は“老婆”役

——演劇との出会いについて教えてください。

出会いは高校時代です。中学校では陸上部に所属し、全く演劇に興味はなかったのですが、幼い頃からよく知っていた先輩に誘われて演劇部に入ったのが始まりです。確か、1年生の時に初めて演じたのが舞台を通行する老婆の役で、台詞はありませんでした(笑)。翌年、2年生になってからはジャン・コクトーの『オルフェ』という作品で主演と演出を務め、ひとつの目標に向かって部員全員で打ち込む演劇の楽しさややりがいを感じたことを覚えています。

——その頃から仕事として舞台芸術に携わろうと考虑してましたか。

いいえ、まったく。進学した慶應義塾大学でも、短期間演劇研究会に所属してはいましたが、舞台芸術を仕事にしようとは考えていませんでした。ただ、高校時代には劇団四季の舞台に独特の魅力を感じて何作も観ていましたし、観劇に伴い、四季の創立者である浅利慶太氏の著作に触れ、インタビュー番組等を視聴するようになって、浅利氏の芸術観や演劇に対する考え方に惹かれ、就職活動の際、劇団に履歴書を送ったのが入社の一きっかけです。

——今、舞台芸術に携わる中で最大の喜びはなんでしょう？

自分が関わった作品をお客様が感動してご覧になっている様子を、同じ空間で一緒に味わえることがこの仕事の醍醐味だと思います。ですから、2020年2月26日に出た政府からの公演中止要請には大きなショックを受けました。同年の7月14日にはふたたび舞台の幕を開けることが出来、劇場にご来場になったお客様のお姿を拝見して、どれだけ舞台を待ち望んでおられたかを実感し、心が震えるような想いでした。どんな困難があってもこの仕事を続けていかなければならないと、今でも強く感じています。

コロナ禍でのさまざまな変化

——コロナ禍で多くのことが変わりました。

大打撃……と簡単には言い表せないレベルの、劇団創立以来の危機でした。緊急事態宣言を受け、一時は公演だけでなく、劇団活動もすべてストップしました。先ず、「長期に亘って公演中止が続いたり、再開できても入場者数に大幅な制限を受けたとしたら、劇団はどのくらい存続できるのか」という最悪のシミュレーションをしました。ある程度の時

間があることが分かったので、コスト削減や人事に流動性を持たせるなど具体的な生き残り策の検討に入り、一方で、出演と所得が直結している俳優たちを守るため、出演したと見なしてギャランティの支払いは続けました。

若い社員を中心に、新規事業に取り組むプロジェクトも立ち上げました。普段から稽古場の食堂で提供され、俳優たちも「100点カレー」の名で親しんでいる商品のレトルト化やオリジナルマスクの販売など、これまでとは違う視点のビジネスも始めました。クラウドファンディングではおかげさまで約2億円ものご支援をいただきましたが(※約半額はチケット購入に使用できるギフトコード等で支援者に還元)、劇団としてこれに踏み切ったのは、資金の需要はもちろんです。コロナ禍で舞台芸術の世界がどれだけ疲弊しているか、社会にもっと知って欲しいという切実な思いと願いもありました。

——大人数が出演する作品での稽古の状況はどうでしょう。

我々は普段から、新作であっても、複数のキャストを同時に稽古してロングランに備えています。特にコロナ禍になってからは、稽古時に違うチームの俳優同士が交流をしないよう配慮しています。これはもちろん、陽性者が出た場合に感染の拡散を防ぎ、速やかに別の俳優がカバーに入れる体制を作るためです。スタッフは稽古の時間が2倍になるので大変ですし、海外作品の場合は来日するクリエイティブチームの理解を得る必要がありますが、安定的な公演運営のためには止むを得ない対応ですね。

舞台芸術業界の新たなつながり

——「日本の演劇」未来プロジェクトに取り組んでいかがでしたか。

劇団四季は首都圏や大都市以外での公演も数多く行っています。都市部から距離が離れば離れるほどコロナへの恐怖感が強くなり、観客動員にも苦勞します。そんな中、資金的なバックアップをしていただけたのはとてもありがたかったですし、安心して東京以外の劇場に作

品を届けることが叶いました。

また、「緊急事態舞台芸術ネットワーク」に参加したことでもさまざまな交流が生まれ、情報の共有など含め、とても勉強になっていると感じます。政府や自治体との折衝の際、国や当局から「舞台芸術界には統一された組織がなく、どこを窓口にしたら良いかわからない」と言う声も聞きました。もし今後、業界全体を襲う新たな災厄が起きたとしても、今の繋がりが活かされるのではないのでしょうか。ネットワークが新たに立ち上がったことで、支える側と支えられる側のコミュニケーションや社会に対する発信力は、量質共に格段に向上したと思います。

——四季以外の舞台作品をどのくらいご覧になりますか？

仕事と趣味、勉強を兼ねて年間80～90作品は観劇しています。その観劇体験がきっかけになって、劇団の先輩である高橋知伽江さんはもちろんのこと、青木豪さんや長田育恵さん、小山ゆうなさん等の仕事を知ることが出来ました。こうした方々が、四季のオリジナル作品創作に参加してくださっていることは本当にありがたく、嬉しく思っています。

——今後の舞台芸術業界が目指す先についてお聞かせください。

日本は急速に少子高齢化が進みます。また舞台芸術は現状では内需型産業ですので、生き残るためにはお客様の裾野をもっと広げる必要があります。劇団四季は「こころの劇場」という社会活動を通じて、長年に渡り全国の小学6年生を対象にした招待公演を行ってきました。コロナ禍の数年は配信映像を通して作品を観てもらいましたが、彼らの多くから「次は劇場で生(なま)を観たい」という声が届いていました。今年からは、ようやく生の舞台による「こころの劇場」を再開できる。将来の観客である子どもたちに良質な作品を届け、彼らがその後、劇団四季のみならず、全ての舞台芸術の愛好者に育ってくれることを祈っています。

[取材 2022年12月22日 / 文 上村由紀子]



代表取締役社長 吉田智誉樹(よしだ・ちよき)

1964年、神奈川県横浜市生まれ。1987年に慶應義塾大学文学部を卒業後、四季株式会社(劇団四季)に入社。おもに広報営業関連セクションを担当し、東京、札幌、名古屋、大阪、福岡にて勤務。2002年3月に制作部広報・ネットグループ長に就任して以降、執行役員広報部長、取締役広報宣伝担当を経て、2014年より代表取締役社長に就任。

Interview

株式会社キョードーファクトリー



対象公演

『きかんしゃトーマス ファミリーミュージカル ソドー島のたからもの』

2022年7月30日 | 大阪府箕面市 | 箕面市文化芸術劇場

『きかんしゃトーマス クリスマスコンサート ソドー島のメリークリスマス』

2022年11月26日 | 栃木県小山市 | 小山市立文化センター

2022年11月27日 | 群馬県伊勢崎市 | 伊勢崎市文化会館

きかんしゃのトーマス達が舞台上を動き回る、子ども達に人気のファミリーミュージカルが日本で初めて上演されてから8年。現在も、トーマス達とともに全国を巡っている株式会社キョードーファクトリーの竹澤寿之取締役役に、子どもや家族らから向けられる舞台への眼差しや、コロナ禍の観劇の様子を聞いた。

「文化を築く」という使命

—— 舞台芸術に携わるようになったきっかけは？

前職で玩具メーカーのバンダイにいた頃に遡るのですが、そこでミュージカルオフィスという部署に配属されたことがきっかけでした。長く携わった作品は『美少女戦士セーラームーン』のミュージカル。今はネルケプランニングさんが上演されていますが、1993年から2005年まではバンダイ版が上演されていて、最初の僕の仕事は版元である講談社さんに上演に向けた権利の交渉をするというものでしたが、その後、公演全体をプロデュースすることになりました。実はきかんしゃトーマスとの最初の出会いはこの頃で、当時は誕生の地であるイギリスにも出向きました。会社が変わってからトーマスの上演に携わり続けることになるとは思ってもみなかっ

たのですが、気づけばとても長い付き合いに……(笑)。不思議な縁を感じています。

—— 竹澤さんはトーマスシリーズをはじめ、ファミリー層に向けた舞台作品を多数手掛けられています。仕事のやりがいを感じる時はどんな時ですか？

僕自身、仕事で舞台に携わるようになるまでは劇場に足を運んだこともなかったですし、日本では「舞台を観る」という習慣がまだまだ一般的ではないと感じます。ロビーでお母さまを迎える時によく聞かれるのが「トイレはありますか？」という質問なのですが、そのくらい多くの人にとって劇場は異空間なのだと思います。だからこそ、終演後に子どもたちがトーマスとの生の出会いを喜び、その傍らで保護者の方も嬉しそうにされている姿を見かけた時はとても嬉しいです。トーマス以外にも『リサとガスパール』、『ベネロペ』、『かいけつゾロリ』、『ウルトラマン』など様々なファミリー

作品を舞台化しました。来年から『はらぺこあおむし』も再び上演予定ですが、これらのラインナップにも「未就学から小学生まで子どもの成長に応じた作品を幅広くやりたい」と思いがあります。形式もそれぞれ違って、作品と客層に応じてキャラクターをかぶりものにする舞台もあれば、俳優に演じてもらう舞台もあります。舞台芸術というエンターテインメントを広げるためには、子どもが演劇に触れることのできる文化を築くことが必要。そんな思いが仕事の原動力であり、やりがいでもあると感じています。

全国のお客様に“会いに行く”意義

—— コロナ禍ではファミリー層の公演にも大きな影響がありました。プロデューサーとしてはどのような思いで興行に取り組んでいたのでしょうか？

ファミリー向けの舞台は行政の管理下にある会館やホールで上演することも多いため、とくに初期の頃は中止せざるを得ない状況が続きました。そのダメージはキャストやスタッフの未来にも影響を与えていて、舞台芸術から離れる方や地元へ帰る選択をする方も多くいました。そういった話を聞くたびにやりきれない思いになると同時に、「どうかこの辛い時期を乗り切って舞台芸術を続けなくては」という使命をこれまで以上に強く感じるようにもなりました。コロナ禍も3年目に突入した頃からは、お客様のスタンスにも少しずつ変化が現れはじめているとも感じています。チケットの売れ行きも徐々に戻り、満席となる公演が増えはじめたことはもちろん、「待ってました」と言わんばかりの熱い反応を客席から感じた時はとても嬉しかったです。苦しい局面も多々ありますが、今後も感染対策を徹底することで一つでも多くの公演を行えるよう全力を尽くしたいと思っています。

—— そんな厳しい状況下でもトーマスシリーズは都内のみならず全国各地での公演を企画されています。そこにはどんな思いがあるのでしょうか？

コロナ禍初期の頃は東京からカンパニーが来ることに不安を感じているお客様も多く、中止が相次ぎました。それでもツアー公演を積極的に行ってきたのは、「あなた

の街に会いに行きます」というコンセプトでこれまでも様々な地域で上演をしてきたから。中には、全国各地で暮らすおじいちゃんやおばあちゃんが「トーマス来るから会いに行かない？」とお孫さんを誘い、帰省の折に三世代で観てくださるお客様もいらっしゃって、そういった観劇の広がりはとても心強く嬉しいものです。

トーマスはセットも大掛かりですし、キャラクターの体も非常に重厚な創りになっているので、終演後にキャラクターがお客様をお見送りすることが難しく、ロビーには必ず等身大パネルを設置することにしています。「帰る瞬間までワクワクしてもらいたい」という気持ちもありますが、劇場が暗くなった時に怖くて席を立つお子さんもいらっしゃるの、舞台のみならずロビーが賑やかで楽しい空間であることも公演における重要な要素だと思っています。

出合いに新たな刺激を受けて

—— 舞台業界全体の未来についてはどんな展望を持っていますか？

僕がこれまで携わってきた作品の中には劇団さんと一緒に創ったものもありますし、公演を通じて知り合った俳優さんの所属劇団の公演に制作サポートとして参加をしたこともあります。通常の仕事ではプロデュース公演が主なので、初めて劇団さんと一緒にした時には新鮮な発見も多く、俳優さんが自ら搬入・搬出をしたりと舞台全体と一緒に手掛けられている姿には驚きもありました。プロデュース公演では見ることのない光景ですが、小劇場をはじめとする演劇ではむしろそういった形が主流だったりもして、文化の違いに刺激を受けることも多いです。作品の種類や公演の形式が違ったとしても、ともに舞台業界にいと、横のつながりは自ずと生まれるもの。互いに刺激を受けられるような出会いの広がりは、舞台業界の未来においても必要なことだと思っています。

[取材 2022年12月7日 / 文 丘田ミイ子]

プロダクション事業部 取締役 竹澤寿之 (たけざわ・としゆき)

バンダイミュージカルオフィス時代に『セーラームーンミュージカル』『BOYS BE』『蜘蛛女のキス』などをプロデュース。その後幾つかのエンタメ企業を経て、株式会社キョードーファクトリーへ入社。『きかんしゃトーマスミュージカル』『かいけつゾロリ』『はらぺこあおむし』等のファミリー作品から『キューティハニー』『ダークネスヒーローズウルトラマン』『ぼくらの七日間戦争』『一瞬の風になれ』『くちびるに歌を』などを企画制作・プロデュース。またJA中野市「えのたん」、チケットぴあ『びっける』、豊島区「そめふくちゃん」等のキャラクター制作やイベントも手掛ける。



Interview

株式会社新歌舞伎座



(左から)貴地谷しほり、瀬戸さおり



(左から)貴地谷しほり、若村麻由美



(左から)香寿たつき、瀬戸さおり、増子俊文江、貴地谷しほり、熊谷真実

撮影：宮川舞子

対象公演

こまつ座『頭痛肩こり樋口一葉』

2022年4月26日～5月28日
大阪市天王寺区 | 新歌舞伎座

1932年に大阪歌舞伎座の新築柿落としが行われてから90年。1966年に株式会社としての設立を経て、様々な芸事で賑わう大阪にて歌舞伎、演劇、ミュージカル、歌謡ショーなど数多くの興行を担ってきた。近年はコロナ禍の厳しさのなかで、様々な興行を届けようと力を掛けてきた興行部制作統括の梅田尚吾氏に、舞台の魅力と今後について聞いた。

舞台監督から制作へ転身

——舞台芸術に携わるようになったきっかけは？

大学3回生の時に建築に興味を持ち、夜間の専門学校にWスクールで通い始めました。その頃、土日開講の俳優養成所の広告が新聞に載っていて、その場所が奇しくも専門学校の隣の駅。俳優を目指す気はなかったのですが、好奇心半分で通ってみよう。それが最初のきっかけでした。卒業後も進路を決めかねていたところ、講師の先生から「自分の関わっている公演を手伝って欲しい」と言われ訪れたのが、道頓堀の今はなき「中座」という劇場でした。その後一年ほどフリーで様々な公演のお手伝いをしていたのですが、24歳の時に新歌舞伎座制作部の先輩に当たる方との出会いがあり、座付きの舞台監督として働くことに。11年働いた後、新歌舞伎座が上本町に移動するタイミングで先代の制作統括

からの誘いを受けプロデューサーに転身。最初は迷いもあったのですがゼロから創造する制作というセクションにも面白みを感じ、飛び込むことにしました。偶然の出会いとご縁が繋がり今に至ります。

——舞台制作の仕事のやりがいを感じるのはどんな時ですか？

舞台監督時代はキャストやスタッフと舞台袖で同じ空気を吸ってお客様と近い場所で仕事することにやりがいを感じていました。そういった意味では、プロデューサーはお客様との距離感も現場スタッフと比べると少し遠く、寂しく感じたことも……。でも、客席の一番後ろから俳優さんのお芝居とお客様の反応を同時に眺めた時に「この景色はプロデューサーだからこそ見られるものだ」と痛感しました。お客様の様子がつぶさにわかるポジションになったことで、それぞれが持ち場を全うして一つの総合芸術を作り上げる

意義を再確認し、「自分のできることを精一杯やろう」と思えるようになりました。一番のやりがいは、やはりお客様の反応です。それを考えながらゼロから作品を作り、うまくハマった時は何より嬉しい。ロングランの公演では立ち上げから結構な時間をカンパニーと一緒に過ごすので、滞りなく千穂楽を迎えられた時の感動はひとしおです。

作品の選択も、コロナ対策の一つ

—— 続くコロナ禍で近年は公演にも大きな影響がありました。制作としてはどのような思いで興行に取り組んでいたのでしょうか？

エンタメは平時であっても衣食住の後にくる世界、緊急事態下では“不要不急”の領域だと言われる方もいらっしゃる。関係者に感染者が一人でも出ると公演はあっけなく中止に。そういった状況はお客様の観劇スタンスにも影響が大きく、いつ公演が中止になるかわからないのでギリギリまでチケットを購入しないという方も増えたように思います。チケットの売れ行きは公演に対する最初の反応ですが、それが読み辛くなることで販売計画はどんどん複雑化していきますので劇場の宣伝・営業担当は苦しい思いをしています。そんな中でもこまつ座『頭痛肩こり樋口一葉』が全国4か所でのツアー公演を無事走り切られたことはとても嬉しい出来事でした。続くコロナ禍で、我々舞台業界に携わる人間は感染対策やリスク軽減を徹底しながら、これまで通り“ライブの力”を信じて、生の良さにこだわった作品を作り続けます。新歌舞伎座では公演期間を通常より短く設定したり、演劇公演とは別に単発のコンサートを積極的に年間ラインナップに加えたりと両輪で回すような工夫も行いました。

—— 新歌舞伎座では『頭痛肩こり樋口一葉』をはじめ、こまつ座の大阪公演を継続的に上演されています。その理由はどこにあるのでしょうか？

こまつ座さんは「井上ひさし作品を後世に繋げよう」と毎年驚くほどの公演回数を組んでいらっしゃるって、そんな中でご縁ができたことはとてもうれしかったです。こまつ座さんのホームである紀伊國屋サザンシアターと新歌舞伎座と

ではキャパシティが違うので客席への伝わり方も異なるところがあると思っていたのですが、上演を経て、新歌舞伎座の一番後ろの席まで伝わる凄まじい台詞の力といいますか、井上作品の『言葉の力』を痛感しました。関西のお客様は「チケット代金は最低でも楽しむぞ。いや、チケット代以上に楽しむぞ」といった前のめりな気持ちで観劇して下さる方が多く、反応の大きさやロコミの広がりも感じました。こまつ座さんは、コロナ禍の演目として『頭痛肩こり樋口一葉』を選ぶに至るにはすごく考えられたと思います。お話の内容もですが、出演者が少ないこともその一つ。リスクを最小限にするべく、何十本もある作品から時期や状況を考え抜いて決めてくださった後世に残すべき素晴らしい作品でした。

横とつながることで描ける未来

—— 舞台業界の未来についてはどんな展望を持っていますか？

奇しくもコロナをきっかけに、舞台業界内の情報交換は密になり、横のつながりは強固なものになりました。時にはライバル同士もタッグを組んで、「なんとかこの時期を乗り越えていこう」といった眼差しを持てるようになったと感じています。商売のやり方はそれぞれ違っても、これまではなかったそんなつながりが生まれたことは心強いです。日本中でタッグを組めれば、海外展開も今以上に取り組みやすくなるかもしれない。一人よりも複数で知恵を出し合った方がいいものができるのと同じで、1社では辿り着けなかった場所に2社3社なら到達でき、自分たちの先輩ができなかったような企画も叶うかもしれない。そんな希望を持っています。収容人数の大小に関わらず大阪はもちろん、東京でも出張の度に必ず一回は観劇に行くのですが、そういったところで頑張っている俳優さんやスタッフさんが舞台芸術の次世代をしっかりと担われているとも感じています。ライブの魅力をと共に信じ、手を取り合って業界全体でやっていけることが今後も増えていくのではないのでしょうか。

[取材 2022年12月3日取材 / 文 丘田ミイ子]

興行部 制作統括 梅田尚吾 (うめだ・しょうご)

1974年京都府京都市生まれ。1996年立命館大学国際関係学部卒業、1997年大阪工業技術専門学校建築学科2部卒業。1999年1月より株式会社新歌舞伎座の座付舞台監督に着任後は約11年間ほぼ全ての劇場公演に携わる。2010年劇場移転を機に制作プロデューサーに転身。2011年7月「中村美津子デビュー25周年記念公演」以降、前川 清、神野美伽、コロケ、山内恵介ら多くの座長公演を手掛ける。ほか「元禄チャリンコ無頼衆 浪花阿呆鴉」(脚本・演出=横内謙介)、「GS近松商店」(作・演出=鄭 義信)など。2020年9月興行部制作統括に就任。



Interview

松竹株式会社

『當る卯歳 吉例顔見世興行』



対象公演

『當る卯歳 吉例顔見世興行』

2022年12月4日～25日 | 京都府京都市 | 南座

『アンタッチャブル・ビューティー ～浪花探偵狂騒曲～』

2022年9月17日～25日 | 大阪市中央区 | 大阪松竹座

1895年の創業から34年で大劇場の歌舞伎公演のすべてを担うようになった松竹株式会社。今や、歌舞伎や演劇の製作・興行や劇場運営などを手掛けるほか、映画や映像、不動産など幅広い事業を手掛けている。取締役兼演劇副部長の船越直人氏に、コロナ禍以降を振り返りながら、2022年度の事業またこれからの演劇業界について伺った。

不急であっても不要ではない

—— 演劇の仕事に携わることになったきっかけは？

実は松竹への志望動機は映画でした。ですが入社して最初に演劇への配属となり、結局、演劇の部署から一歩も出ることなく現在に至ります(笑)。最初の年に歌舞伎座の劇場運営、翌年に歌舞伎座の監事室に勤めたため、歌舞伎をほとんど観てこなかった私は俳優さんの顔と名前を一致させることから始めました。その後、関西で南座と大阪松竹座の監事室を兼任するなどし、東京に戻ってからは歌舞伎の製作プロデューサーに。さまざまな公演に携わりましたが、新作でいえば「尾上第五郎劇団」(六代目第五郎亡き後、薫陶を受けた俳優たちが生んだ劇団)の作品に多く関わりました。2000年代半ばの『児雷也豪傑譚話』や『NINAGAWA 十二夜』の上演された時代です。

『アンタッチャブル・ビューティー～浪花探偵狂騒曲～』



—— コロナ禍でどのようなことを感じられましたか？

最初に「不要不急」というワードが世の中に出回った時、演劇や音楽のライブはその最たるものであるかのような扱われ方をしたと思います。確かに「不急」ではあるかもしれない。けれど「不要」とは一緒にしないでくれよ、というのが私の本音でした。「不要ではない」というのは私の信念です。

京の町にも欠かせない興行

—— 京都の南座で毎年行われる『吉例顔見世興行』は、1906年の初演から戦時中でもスペイン風邪の中でも休まず上演され続けているそうですね。

『吉例顔見世興行』は、タイトルの頭に「京の年中行事」と付きますが、まさにその通りで、京都の街おこしと一体化しています。毎年、紅葉の季節が終わり観光資源の少ない12月に上演し、例えば呉服屋さんなら顧客を招待して芝居の後

に呉服を買ってもらったり、お茶屋さんは観劇後に宴会をしたりといった行事とセットになって産業全体の活性化の意味も大きかった興行です。時代の変化で今は様相も変わってきていますが、それでも『吉例顔見世興行』で観劇体験をする、というのは京の町でのステイタスのようになっており、地場で商売をしている人にとっても欠かせない興行です。ですので、長く続く興行としてだけでなく、京の年中行事の流れを途絶えさせなかったという点でも、コロナ禍での興行続行は非常に重要な出来事となりました。

—— 続けるということが街のエネルギーにもなる興行なのですね。

2020年の時には運営を2チームづくり、何か起きてもカバーできるよう準備しました。構成は、もともと約4時間の2部制だったものを、この3年間は約2時間の3部制に変更し、俳優も3チームで重ならないようにしています。かかる労力は何倍にもなりましたが、それでも恒例行事として上演できたことへの感慨を口にするお客様や関係者は多い。続けられてよかったです。

—— もう一つの対象公演『アンタッチャブル・ビューティー～浪花探偵狂騒曲～』は初日と千穉楽のみの上演となりました。

このカンパニーは新型コロナウイルスの影響を最も受けたのかもしれませんが、2020年と、2021年に上演予定でしたが公演中止になってしまい、翌年、満を持して開幕したのに2日目から中止。千穉楽はなんとか上演できました。ですから、配信ができて映像として残ったことはありがたかったです。そしてこうして記事で取り上げてくださっていることも、関わった人達にとっては良いことのように思います。注目してもらった証になりますので。

—— 千穉楽は外部から代役を立て、演出も変更しての上演でした。

急遽出演してくださったキャストの皆さんの心意気を感じました。一度できあがった芝居に後から入るのは大変なことだと思うのですが、熱意を感じ取り、助けてくださった。それは本当に大きな助けでした。

繋がる事も離れる事も大切

—— コロナ禍が続く中で、舞台芸術のこれからについてどう思われていますか？

コロナ禍によって緊急事態舞台芸術ネットワークが生まれたことは画期的な事象だったと思います。こんなことでもなければ、演劇業界が横串を通して活動することはなかったと思いますから。行政にとっても、演劇業界をアシストしようにも、古典芸能からミュージカル、2.5次元、小劇場まで様々な形態があり、何を基準に考えれば良いかがわからなかったでしょうし。我々がまとまることで、最大公約数的に何に困っているか、どのようなサポートが必要かを提示できたのは非常に良いことでした。

ただコロナ禍も4年目となり、これからの緊急事態舞台芸術ネットワークの課題は非常に複雑になるだろうと思っています。メンバーの中には、我々のように演劇以外にも柱がある会社もあれば、演劇に特化して一本柱で活動されている会社もあり、同じ物差しで測れないことも出てくるでしょう。せっかく良いものを作っているのに、会社の規模などが理由でふるいにかけられるようなことはあってほしくない。そのためにどうすれば良いのかを提案し合っていけることが、今後の肝になるかと思っています。

ただ一方で、演劇の世界にいる人達は、多くが自分の方向性、自分のポリシー、自分の美学がある方だと思います。ですから「横並びに合わせましょう」があまり強すぎると、それはそれで演劇文化が豊かに広がっていく妨げになるのではないかと思うのです。時には「あの劇団とは違うことをする」の意識だけで新たなスタイルの芝居が生まれるような世界です。繋がることばかりを強制したり義務づけたりすると、枠組みからはみ出して表現しようとする勢いを削いでしまうこともあるかもしれない。いい意味で繋がって、いい意味で離れて、個々の個性を保っていきたいです。

[取材 2023年1月18日 / 文 中川實穂]

取締役 演劇副部長 船越直人(ふなこし・なおと)

1966年11月9日生まれ。1991年松竹株式会社へ入社、歌舞伎座に配属される。1994年から関西座館での劇場勤務を経て、2003年に東京本社へ異動し、歌舞伎の製作部門に勤務。コクーン歌舞伎『桜姫』・『東海道四谷怪談 南番・北番』や『児雷也豪傑譚話』、『NINAGAWA 十二夜』などの新作歌舞伎を担当する。2009年以降は歌舞伎座や新橋演舞場の劇場運営にあたり、2013年新開場した歌舞伎座の支配人に就任した。2014年執行役員、2019年取締役に就任の後、現在は取締役演劇副部長として同社の演劇統括部門を担う。



Interview

株式会社 ネルケプランニング



© 武内直子・PNP / ミュージカル「美少女戦士セーラームーン」製作委員会2022



対象公演

『「美少女戦士セーラームーン」30周年記念 Musical Festival - Chronicle -』

2022年11月17日～20日
東京都港区 | 品川プリンスホテル ステラボール

株式会社ネルケプランニングは2.5次元ミュージカルのほか様々な舞台の制作を手掛けている。なかでもミュージカル「美少女戦士セーラームーン」の歴史は長く、90年代のバンダイ版をはじめ多くの人々に愛されてきた。作品生誕30周年を迎えた大きな節目にどのような思いで望んだのか、ステージ制作担当の栗栖愛実氏に伺った。

客席の反応が一番のエネルギー

—— 舞台芸術に携わるようになったきっかけは？

私と舞台芸術の最初の出会いは中学の演劇部に入ったことでした。中高生の頃は「仕事にしたい」という明確なビジョンを持っていたわけではありませんでしたが、後にある舞台を観劇した時に心を打たれ、「好きと思えるものに携わりたい」と意識をするようになって……。就活の折には真っ先に「舞台芸術」と職種検索をかけましたが、当時は選べるほど多くはヒットしなかったので飛びつくようにエントリーしたのを覚えています(笑)。業界に入ることが叶い、配属さ

れた部署は営業でした。制作には今の会社に転職してから携わるようになったのですが、興行の成り立ちや作品を創り上げる過程を詳しく知らなかった私にとってその毎日は新発見の連続。同じ業界でも立場やセクションによって見えるものが違い、その視点の全てが必要であることを痛感しています。

—— 栗栖さんは長年上演され続けている、ミュージカル「美少女戦士セーラームーン」シリーズの制作に携わっておられますが、仕事のやりがいを感じる時はどんな時ですか？

2022年は作品生誕から30周年の節目となり、『「美少

女戦士セーラームーン」30周年記念 Musical Festival - Chronicle-』を上演しました。コロナ禍で客席に近づくような演出ができず、お客様にも自由に声を出してもらえなかったりと、もどかしい部分も多々あったのですが、そんな制約の中でも拍手やペンライト、「美少女戦士セーラームーン」グッズなどを駆使して観劇の喜びを全身で表現して下さるお客様の姿には込み上げるものがありました。ともすれば声を出せていた時よりも強い愛を感じた瞬間もあったほど、上演できた喜びで胸がいっぱいになりました。“できないこと”が目立つ時節でも“できること”で最大限に舞台を楽しむお客様の存在からは多くの希望やエネルギーをいただいていますし、そんな客席の風景が最も大きなやりがいだと感じています。

伝承される戦士たちの絆

—— コロナ禍では創作過程においても影響があったと思います。制作者としてはどのような思いで現場にいらっしゃいましたか？

2020年8月に開幕予定だった公演が中止になり、延期の末に上演できたのは翌年9月でした。キャストが決定しているにも関わらず発表できない時間が1年ほど続き、それぞれが様々な思いや未来への不安を抱えていたと思います。「美少女戦士セーラームーン」シリーズの最大の魅力は戦士の絆だと思っているのですが、キャスト同士が互いの距離を保たなくてはならない状況でそういった“絆”を創り上げていくことにはすごく苦勞をしましたね。キャストさん達のやりづらさは計り知れないものですが、それでも稽古場の行き帰りなどの限られた時間で互いにコミュニケーションを深め、見事に戦士の強い絆を体現してくださいました。劇場に来ることの叶わないお客様も多く、万全のタイミングでシリーズ初登場となるセーラー戦士達の姿を見届けてもらえない悔しさもあったのですが、みなさんの尽力のお陰で素敵な作品を送り出すことができましたと感じています。

—— シリーズ作品を上演し続けていく上ではどんな工夫をされているのでしょうか？

これまでは舞台公演として上演してきたのですが、30周

年記念公演をきっかけに「ミュージカルフェスティバル」と銘打って、初めて公演全体を通してライブ要素を盛り込む試みに挑戦しました。過去シリーズのキャスト・スタッフの方にも回替わりでゲスト出演をお願いし、さらに時を遡って1993年から2005年まで上演されていたバンダイ版の公演の制作委員会に携わった各社様のお力を借りて、当時出演していた方々にもお声がけをしました。一つの作品を通じて、世代の垣根を越えた交流が実現できたことはとても感慨深かったです。

近年はお客様の層にも変化があり、海外からのお客様、男性のお客様やお子さんと一緒にご来場されるお母さんも増え、世代や性別、国籍を越えた伝承を感じています。そういった広がりや繋がりこそが「美少女戦士セーラームーン」シリーズの魅力だと思うので、今後もより多くのお客様に楽しんでいただけるような工夫を考えていけたらと思っています。

世代やジャンルの垣根を越えて

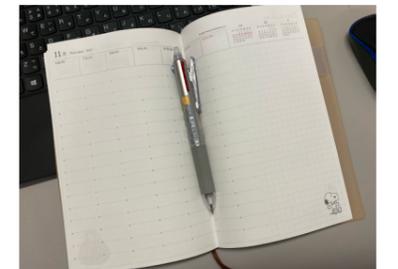
—— 興行元や時代を越えた交流にも通じることだと思うのですが、舞台業界全体の横の繋がりが今後についてはどんな展望を持っていますか？

今まではそれぞれがバラバラに活動しているような感覚がありましたが、奇しくもコロナという強大な敵とともに立ち向かうことで、これまではなかった業界内の繋がりが生まれたと感じています。現状はコロナ対策における情報交換などを介して交流をしていますが、この関わりを持続し更新させることでコロナが終息した後も業界の発展が望めるのではないのでしょうか。都市部だけでなく、全国各地の公演で地域と連動・密着して活性化に取り組むことでさらなる舞台芸術の繁栄に繋がりたいという思いもあります。世代やジャンルや土地……それぞれに違った強みがあるからこそ、長所を上手に活かして繋がっていったなら、舞台芸術そのものがよりポピュラーな文化に近づいていくのではないかな。そんな風に期待をしています。

[取材 2022年12月26日 / 文 丘田ミイ子]

ステージ制作担当 栗栖愛実(くりす・まなみ)

大学を卒業後、演劇・ミュージカルの興行会社で営業を経験し、2016年ネルケプランニング入社。主にミュージカル「美少女戦士セーラームーン」シリーズ、ミュージカル「新テニスの王子様」シリーズなどを担当。「Pretty Guardian Sailor Moon」The Super Liveではパリやニューヨークなどの海外公演を経験。現在はアシスタントプロデューサーとしてステージコンテンツの制作に携わっている。写真は、仕事の必須アイテムである手帳。



Interview

株式会社博多座

2022年新橋演舞場公演



対象公演

『女の一生』

2022年11月18日～30日 | 福岡市博多区 | 博多座



©松竹

福岡市にある劇場・博多座は九州での大型公演の基幹劇場として、演劇、歌舞伎、ミュージカルなど様々な作品を上演している。経済界・興行界・行政が一体となり演劇興行をおこなう日本初の企業として誕生し「芸どころ博多」の文化を牽引してきた株式会社博多座。その演劇部に所属する西中治朗氏に話を聞いた。

華やかな表舞台を裏から支える

—— 演劇との出会いについて教えてください。

もとは演劇より映画の方が好きで、成人するまであまり舞台を観たことがなかったのですが、1999年の博多座開場の際に柿暮落としの歌舞伎を観劇し、先代の市川團十郎さんや尾上菊五郎さんが織りなす華やかな世界と舞台上のエネルギーに圧倒されました。今思えば、あの体験が今の仕事に就ききっかけのひとつです。

—— 最初から博多座でお仕事を？

当初は博覧会やイベントでスタッフ業務を行う人材の派遣会社におり、博多座がオープンする際は劇場内の案内やチケットの予約業務を担うスタッフの募集、教育、管理などを取引先である別会社の人間として担当していました。そこ

から一度、地元の大阪に戻りましたが、「一緒に働かないか」と折に触れて博多座より声をかけて貰い、入社以降はさまざまな部署を経て、現在の演劇部に配属された次第です。

—— 今のお仕事での喜びって何でしょう。

私が所属する演劇部の舞台グループはおもに公演の現場管理を担っているため、華やかな表舞台の裏側で俳優さんが地道な努力を重ねる姿や様々な葛藤を経ていく様子を間近で目にする機会も多くあります。出演者のそういった熱量に触れ、座組みの一員として舞台の裏側から作品を支えられることは、この仕事をする上での喜びのひとつです。

遠征観劇者にも人気の劇場

—— コロナ禍で多くのことが変わりました。

2020年、博多座は約7ヵ月間、劇場を閉鎖しました。

これには大きく分けてふたつの理由があります。ひとつは2月26日に政府から出された公演中止要請、もうひとつは博多座の公演体制。後者について説明すると、博多座は自社製作の舞台より、他の興行会社が製作した作品の上演権を購入し、公演を実施するパターンの方が多く、元の興行会社の公演が中止になった場合、その影響をもろに受けてしまうためです。また、劇場の再開後もしくは客席の稼働を50%に抑えたため、本来ならば満席を見込んでいた公演でもお客様の数は半数という厳しい状態が続きました。

—— 博多座は他地域からの観劇遠征者に絶大な人気を誇っています。

日常とは少し違う時間をお楽しみいただければと常に工夫するよう心がけています。例えば歌舞伎公演の際に劇場内のショッピングゾーンで着物や和装小物の販売をしたり、ミュージカルの公演中にスイーツの店舗を増やしたり。いつもお客様がご来場くださっても新しい発見や楽しみを見つけていただけるよう意識していますし、SNSでも公演の宣伝に加え、演劇、ミュージカルファンの方の心に届くような発信を積極的に行っています。基本的な商圈エリアである地元のお客様に支えていただきながら、遠征して下さる方も多いのはありがたいことです。

—— 「日本の演劇」未来プロジェクトに参加なさっていかがでしたか。

対象公演は『女の一生』でしたが、コロナへの恐怖心が若い世代に比べて強い年配のお客様がメインターゲットということもあり、特に発売開始すぐにはチケットの売れ行きが厳しかった中、今回のプロジェクトにより補助をいただけたことは非常にありがたかったです。そのお陰でチケットの価格を少し抑えられ、結果的に数多くのチケットセールスに結びついたことには感謝しかありません。

『女の一生』は大竹しのぶさん演じる主人公が様々な逆境に立ち向かいながらたくましく生きていく物語ということもあり、主人公にご自身の半生を重ね合わせたお客様も多くいらしたようで「舞台を観て元気を貰った」「迷ったけれど劇場に来て本当に良かった」との声も多数いただきました。

演劇部 西中治朗（にしなか・じろう）

2003年株式会社博多座入社。前職の人材派遣・イベント運営会社で博多座の案内係、チケットの管理、運営業務を請け負い、劇場の開場に携わる。博多座入社後は、場内サービス、チケット管理、会員担当、宣伝、舞台管理、制作の部署を経て現在演劇部長。趣味はミニシアター系映画の鑑賞。



地方自治体との力強いタッグ

—— 対象公演の実施において意識したことなどあれば教えてください。

博多座は劇場の運営母体に福岡市が入っていることもあり、以前、ある公演中にコロナ陽性者が複数名出た経験から、PCR検査と同等の結果を15分で得られるNEAR法という検査法をいち早く取り入れたことをはじめ、市の協力のもと医療機関とのルートを構築し、24時間体制で検査や診療を行える体制を築いてきました。さらに公演関係者にコロナ罹患者が発生した場合は、すぐ専門業者に劇場内を消毒して貰うよう対策しています。『女の一生』はある程度、陽性者数が落ち着いた状況下で公演を実施できました。しかし、まだ感染対策は必要との状況も鑑み、福岡まで来てくださったキャストやスタッフの皆さんにご無理のない範囲で気分転換していただければと、1人でも食事がしやすい劇場周辺の美味しいうどん屋さんや、テイクアウト可能な飲食店、話題のパン屋さんのオリジナルマップを作成し、俳優さんやスタッフの方たちにお渡ししました。

—— 舞台芸術業界への希望や展望などありましたらぜひ。

私共の話になりますが、2023年2月上演の歌舞伎『新・三国志』の際には、大向うを復活できればと思います。やはり大向うさんの掛け声がないと演出全体にも影響が出る気がしますので。また、ミュージカルの公演でもオーケストラピット内の密を避けるため、楽器によっては舞台袖など他のメンバーと離れた場所での演奏を余儀なくされるパートも。そうすると演奏音は一旦PA(音響機構)を通りますので、本来の生(なま)の音をお客様にお届けするのが難しくなってしまいます。まずはこの2点をコロナ禍前の形態に戻し、ベストな状態でお客様に作品をお届けできればと考えています。

[2022年12月26日取材 / 取材・文 上村由紀子]

Interview

株式会社御園座



御園座 外観



御園座 内観

対象公演

『よしもと爆笑公演』

2022年11月22日～27日 | 愛知県名古屋市 | 御園座

名古屋市にある御園座は「東西に負けない、一流の劇場を」と1897年(明治30年)に開場した。以来、歌舞伎、ミュージカル、コンサート、宝塚歌劇などの様々な演目を上演。うち、吉本興業の芸人が日替わりで出演する『よしもと爆笑公演』は人気公演だ。コロナ禍で劇場での笑いを実現する取組みや思いを、公演担当の古田あゆみ制作部長に聞いた。

恒例公演に長く携わる喜び

—— 舞台芸術に携わるようになったきっかけは？

今はネット予約が主流の公演チケットですが、昔は劇場が電話で予約を受け付けるというのが主な手段で、私が最初に劇場で働くようになったのも大学の友人の紹介を機に始めた電話予約のアルバイトでした。臨時電話をたくさん用意して、アルバイトも社員もフル動員して一斉に予約を受けるのですが、その様はまさにコールセンター。今の劇場では見られないような光景です(笑)。その後、一度は他の会社で就職したのですが、劇場でのアルバイトを続けていた友人つてに「社員さんがやめてスタッフが不足している」と聞き、正式に劇場に入社することに。最初に入社したのは、かつて

は御園座と同じ名古屋市にあった中日劇場。営業事務に配属され、その後制作事務と宣伝部を経て、5年前からは御園座制作部で働いています。興行に係るあらゆるセクションを経験したことは今でもすごく役に立っています。

—— 古田さんが担当されている『よしもと爆笑公演』は年末の恒例公演でもあり、固定ファンの方も多いのではないでしょうか？

『よしもと爆笑公演』そのものには30年ほどの歴史があります。中日劇場で始まり、御園座での上演は去年で5年目。私が担当しているのは30年の内10年ほどなのですが、その間でもやはり毎年楽しみに観に来てくださるお客様は多く、本当に嬉しく思っています。

同じ公演に長く携わる上で心がけていることは、毎年お

馴染みの「恒例感」は出しつつも、前年の客席の反応などをフィードバックして内容や構成面に工夫を凝らすことでしょか。キャスティングは吉本興業さんが担当されているのですが、ベテランから若手までバリエーション豊かなお顔ぶれとその芸が堪能できることは30年変わらない吉本興業さんのこだわりであり、この公演の見どころの一つでもあります。『よしもと爆笑公演』で初めて知った芸人さんたちが後に広く活躍されていくことも多く、テレビなどで見かける度に嬉しい気持ちになっています。

お客様の生の声が原動力に

—— 「笑い」の反応が大きいお笑い公演をコロナ禍で上演する上では制約も多くあったのではないかと思います。どのような対策や工夫をされていたのでしょうか？

年末恒例の『よしもと爆笑公演』はお笑いライブと吉本新喜劇で構成されており、夏にも『夏休み!!! 吉本新喜劇と日替わりバラエティ公演』という同じ構成の恒例公演を上演しています。2020年夏がコロナ禍で上演する初めてのお笑い公演で、当時は「お笑いライブはいいけど、吉本新喜劇の方はできないかもしれない」と言われていました。フェイスシールドを装着して稽古をするなどあらゆる対策をやっていたのですが、それでも上演が叶うかはギリギリまで分からなくて……。お客様に聞かれた時には「やる予定です」と答えてはいたのですが、内心ドキドキしていたことを覚えています。公演時も、出演される芸人さんたちは街中には出ず、ホテルと劇場を往復していただくような状況でしたので、劇場から出すお弁当のバリエーションもものすごく考えました。客席の50%しかお客様をご案内できなかった空いている席が寂しくならないように、「笑いはマスクの中で」「大きな拍手をお願いします」など、感染対策のメモを工夫した文言で張り出したりもしました。大変な時期ではありましたが無事上演を迎えられ、それから毎年のようにお客様が心待ちにしてくださっていることが嬉しいです。

—— ご苦労も多かったと感じますが、そんな中でも制作としてやりがいを感じる瞬間はどんな時でしょうか？

コロナ初期の頃は半数しかお客様を入れることもでき

ないこともあって、私たち制作サイドの人間も公演が盛り上がるかどうか不安な思いでいました。でも、いざ幕が開いたら、反応がとてもよく、拍手も沢山上がって……。お客様が心待ちに下さっていることが伝わってきて、胸がいっぱいになりました。終幕後のロビーで「上演してくれてありがとう」と直接お声をかけて下さる方もいて、本当にやってよかったと感じましたね。御園座という劇場を運営していて常々感じるのは、そんなお客様との心の距離の近さ。コロナ禍ではご高齢のお客様から「公演に行きたい」という相談を電話口で受けることもあり、「地域の居場所」として親しみを持ってくださっていることを痛感しました。初めて訪れるお客様にも常連のお客様にも居心地良く楽しい時間を過ごしていただけるよう、今後も工夫を重ねたいと思っています。

劇場が身近な場所であるために

—— 舞台業界全体の未来についてはどんな展望を持っていますか？

ここ数年のコロナ禍で劇場間の情報交換は盛んになったと感じています。とくに、同じ演目が東名阪など様々な地域で上演される時には、どういった準備や対策をしたか、お客様の反応はどういうものだったかを共有する機会も多く、それらを踏まえてそれぞれが判断をし、上演に臨んでいたような体感がありました。

3年経った今でも中止になる公演は後をたたず、今後も増えていく可能性もあると思います。積極的に劇場にいられていただお客様もコロナ禍前に比べるとその回数は大幅に減ってしまっていたり、まだまだ完全に元通りとはいかない状態。それでも、少しずつ状況が緩和されていくことを信じて、より多くのお客様が「劇場に行きたい」と思ってくれるような環境を整え、新たな試みにも積極的に挑戦していきたいです。

[取材 2023年1月14日 / 文 丘田ミイ子]

制作部長 古田あゆみ (ふるた・あゆみ)

電話予約が主流な頃、アルバイトを経て名古屋三座のひとつ・中日劇場に就職。2018年3月中日劇場閉館。同年4月に新装開場した御園座で働きだして、はや5年。老害と言われながらも老体にむち打ちながら働く女史。写真は、お気に入りの場所である御園座の2階12列目の隣の席。他の人に左右されず、自分だけの世界で舞台が見れる場所。仕込み中など、デスクワークに疲れると座ってボーとしている。



Interview

株式会社東急文化村



対象公演

Bunkamura『ツダマンの世界』

2022年11月24日～12月18日 | 東京都渋谷区 | Bunkamura シアターコクーン



撮影：細野晋司

株式会社東急文化村が渋谷にて運営する新たな文化・芸術の発信拠点のうち、Bunkamuraは日本初の大型複合文化施設として1989年に開館した。2023年4月10日から2027年度中までの休館予定を前に、コロナ禍でどんな思いで取り組んできたのか。舞台芸術事業部第二企画制作室部の武内純子氏に、シアターコクーン芸術監督・松尾スズキ氏の新作『ツダマンの世界』を中心に聞いた。

初の制作チーフ公演は自粛明け

—— 演劇の仕事に就いたきっかけを教えてください。

母親が好きだったこともあり、子供の頃に劇団四季などを観ていました。学生時代に裏方の仕事に興味を持つようになって、社会人劇団に入って制作を担当し、それが楽しかったことが生業にするきっかけです。他業種の仕事もいくつか経験してからBunkamuraに入社して、「制作の仕事にお給料が出るんだ」ということに感動しました(笑)。東京には、これが仕事として成り立つ土壌があることを実感しましたね。

—— 対象公演『ツダマンの世界』は武内さんにとって、制作進行チーフとして3作目の公演だそうですね。

Bunkamuraの公演では、ひとつの公演の制作進行にチーフが1人とサブが1～2人という体制を取るのですが、そのチーフとして3作目の公演です。私はBunkamuraに入社

して5年目で、初めてチーフを務めたのも2020年の自粛期間が明けてからの公演でした。

—— 手探りの状況の中、チーフとして初現場というのは大変だったのではないですか？

当時はまず、どう感染症対策をとりながら制作を進めていったらいいのかという難しさがあって、次々と直面する問題に「今、舞台を上演するのは間違っているのかな」と悩むことも多かったです。ですが実際に何本もの公演中止を目の当たりにし、「止めてはいけないんだ」と思うようになりました。舞台を上演し続けたいと、たくさんの方が生活できなくなる。ひいてはこの先の演劇を担う人がいなくなってしまう。だから止めてはいけないんだと思いました。

—— 制作の仕事内容もコロナ禍で変わりましたか？

やるが増えました。制作がケアすること、気にすること、判断を迫られることはとても多くなったと思います。

円滑に作品をつくる為の準備

—— 『ツダマンの世界』は東京、京都と上演されましたがいかがでしたか？

松尾スズキ芸術監督の新作で、これまでにあまり描いてこなかったモチーフを扱いながらも、エンタメ性がたっぷりあったのでお客様にはとても満足していただけたと思います。京都公演はキャストから体調不良者が出たため、初日は代役を立てて上演に踏み切りましたが、カーテンコールですぐにお客様がスタンディングオベーションをしてくださって。それを見た時に「無事に上演できて本当に良かった」と思いましたし、高い熱量で待ってくださっていたことも感じました。

そういうこともあり、今回改めてアンダースタディの存在の重要性も感じました。作品によって、代役を立てて公演を続けるかの判断は違ってくると思うのですが、本番だけでなく、稽古でも止めずに進行できることは大きかったです。

—— 現場でのコミュニケーションはどうされましたか？

そこはキャスト・スタッフ共に本当に難しいところで。コロナ禍前なら雑談や稽古後の飲み会などでフォローできていたことができなくなっている、「仕方ない」ではいけないと思っています。松尾さんは、今作で初めてご一緒するキャストの方とは事前に面談の時間をとり、お話をされてから稽古初日を迎えるようにしてくださいました。いきなり自分から話しにいけないタイプの方にとっては、事前に一度話しているだけでも違いますから。コロナ禍のコミュニケーションの取りにくさを踏まえ、どうすれば少しでも作品づくりがスムーズになるかを考えてくださいました。

新しい考え方も取り入れたい

—— この3年間で舞台芸術の現場でもさまざまな変化がありましたね。

大変なことが多いのは確かですが、良かったこともあります。ひとつは映像配信が定着したことです。以前は「舞台は生で観るから価値がある」という思いもありましたが、

企画制作部 武内純子(たけうち・じゅんこ)

愛知県豊橋市出身。大学卒業後に他業種で複数社勤務した後、2017年練東急文化村へ入社、舞台芸術事業部に配属されシアターコクーンで演劇公演製作に携わる。シアターコクーンで担当した公演は「物語なき、この世界」「広島ジャンゴ2022」「ツダマンの世界」。



いろいろな地域の方が様々な公演にアクセスする機会が増えたことはすごく良かったと思っています。演劇に興味を持ってもらうことにも繋がりますから。ただ、配信を行う際の音楽にまつわる著作権まわりの確認作業は、まだ経験と知識が乏しいので非常に大変です。

もうひとつ大きかったことは、演劇業界で横の繋がりが生まれたことです。感染症対策などは、緊急事態舞台芸術ネットワークに参加する方々のアイデアや情報を参考にさせてもらうことも多かったです。今までは、競合でもある他の劇場の方に意見を伺うということはしにくかったと思います。でもこの誰も経験のない状況を乗り切るために、お互いに腹の内を明かしながら、アイデアを出し合いながら、取り組んでこられたことは大きな変化でした。横の繋がりは非常に大事ですね。

—— コロナ禍は続いています。舞台芸術業界のこれからについてどう思われますか？

今、私がこれからのために考えたいことは、働き方です。創作の現場はどこも同じだと思いますが、演劇の現場もどうしても、ワーク・ライフ・バランスが崩れがちです。初日に向けて総出で作っていくものですし、人と人とのコミュニケーションが重要な要素でもあるので、かっちり「9時5時で」とはいきません。でも、そこを踏まえたくえでも私達自身が働き方について考え、新たに工夫する必要はあると思います。例えばこの数年で舞台の映像配信が定着したように、働き方に関しても新しい考え方を取り入れていかないと、演劇の仕事をしたという人が増えないのではないかなと思うんです。どうすれば少しでも働きやすい場にできるかというのは、これから考えていかなければいけない課題かなと思います。演劇だけが持つパッションを、なんとかして繋いでいきたいです。

[取材 2023年1月12日 / 文 中川真穂]

Interview

株式会社ホリプロ



撮影：田中亜紀



対象公演

ミュージカル『東京ラブストーリー』

2022年11月27日～12月18日 | 東京都豊島区 | 東京建物 Brillia HALL

マネージメントのほか音楽、映画、テレビ番組などの企画・制作、文化・スポーツ施設経営などエンターテインメントに幅広く携わる株式会社ホリプロ。舞台公演では故・蛭川幸雄氏演出舞台の海外公演を多く実施し、近年は海外大型ミュージカルの上演を手掛ける。国を越えて様々な作品を届ける仕事への思いを、梶山裕三プロデューサーに伺った。

素敵な出会いを生むために

—— 演劇の仕事をした経緯を教えてください。

アメリカの高校に1年間留学した時に、校内で『サウンド・オブ・ミュージック』を上演する機会がありました。僕は以前よりフレンチホルンを習っていたので、オーケストラに参加しました。歌も作品も素晴らしくて、俳優の歌声と僕達のオーケストラの音が重なった時にとても感動し、その記憶がずっと残っていたんです。

そして帰国後、大学に入学しミュージカル研究会に入りました。現在、脚本家として活躍されている長田育恵さんが僕の一学年先輩にいて、長田さんが作・演出を務めたミュージカルの主演をさせていただいたこともありました。2年からは自分でも脚本を書いたり、作曲をしたりし始め、取り憑かれたようにオリジナルミュージカルを作りました。誰

に何を言われるわけでもなく、ひたすらに作品を作り続けて……。そのうちに「演劇を職業にできれば」と思うようになりました。

実は、新卒で吉本興業に入社したんです。2年目から配属になった吉本新喜劇で、毎週劇場にける新作を作っていました。プロデューサーとして200本近い舞台を制作し、いろいろな修行をさせていただいたのですが、もっとじっくりと舞台を作りたいという思いが芽生えて2006年に現在のホリプロへ転職しました。

—— 舞台に携わる中での楽しみややりがいとは？

演劇作品は公演で得られる収入に限られるので、制作陣は少人数なんです。それは裏を返せば、その作品が成り立っていくすべての過程に立ち会うことができるということです。しかも、自分達の作品をお客様に観てもらって拍手をいただける。一般的に、自分達が作ったものを誰がどこで楽しん

だり手にしてくださるのが分からない仕事が多いと思いますが、僕達の仕事は間違いなくその瞬間を目にするんです。それはとても幸せなことですね。

一番のやりがいは、素晴らしい出会いを提供できた時です。ある俳優の方に、今まで演じたことのないような役をオファーしたら評判を呼んだり、題材とクリエイターの新しい出会いがあったりといった、誰かにとっての素晴らしい出会いを生み出した時に「本当にこの仕事をやって良かったな」と思います。

行き場のない葛藤がある

—— コロナ禍における公演の状況をどのように捉えていますか？

2020年からコロナ禍となり3年目を迎えますが、非常に厳しい戦いが今も続いています。すでに様々な方が「対策としてはこれをやっていこう」という感染予防対策をお持ちだと思います。それでも第7波、第8波がくるとなると、稽古場以外での感染の可能性もあります。これ以上何を対策したらいいのか、行き場のない葛藤を抱えています。

公演中止という決断となる場合には、チケットも払い戻しとなりますから経済的にも大打撃ですし、本当に大変です。今はキャストもスタッフもただただ作品を上演することだけに集中しているので、いつかその努力が報われ、早くマスクを外して稽古や打ち上げなどができるようになってほしい。一刻も早くコロナ禍が終わってほしいです。

—— 『東京ラブストーリー』の現場ではどのような感染予防対策をとられましたか？

稽古に入る前にPCR検査をするほか、稽古場では靴を室内履きに履き替え、マスクをしたまま稽古をしました。劇場に入り、場当たりをして、シーンを通すその時までマスクはつけたままです。また、稽古場でご飯を食べなくていいように、なるべく食事時と稽古が重ならないよう稽古時間を設定しました。なお『東京ラブストーリー』はメインキャスト2チーム制で上演しましたが、特に稽古の中盤以降は、一方の

公演事業本部ファクトリー部部长 梶山裕三 (かじやま・ゆうぞう)

早稲田大学在学中にオリジナル・ミュージカルを上演する早稲田大学ミュージカル研究会に所属し、脚本・演出を担当。卒業後、舞台制作者を志す。2001年に吉本興業株式会社入社。大阪・なんばグランド花月でよしもと新喜劇の制作を担当したのち、2006年に株式会社ホリプロに転職。2022年6月より現職。俳優・藤原竜也の主演舞台を多くプロデュースするほか、近年は「日本から世界へ発信する」という目標を掲げ、オリジナル・ミュージカルの企画も手掛ける。プロデュース作品に『スリル・ミー』『デスノート THE MUSICAL』『生きる』『東京ラブストーリー』など。上演中の舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』ではマーケティング・プロデューサーを務める。



キャストの稽古が終わってからもう一方のキャストの稽古を始めるというように時間を完全に分けていました。

世界に通用するような作品を

—— 横の繋がりやネットワークを持つことにどのような意義を感じていますか？

コロナ禍以前の演劇業界は、各社とも腹の探り合いのようなくところもあり、事前に情報交換することはありませんでした。でもコロナ禍になり、助成金関連や感染予防対策の最新状況など、一社ではすべてを把握できないのでそれぞれが持っている情報を共有する必要が出てきました。例えば公演中止に伴うチケットの払い戻しの補償についても、A社よりもB社の方がお客様に対して少ないお支払いをしてしまうことは避けたい。横の繋がりを通して得られた情報は、誰も経験したことのないコロナ禍で物事を決定する上で欠かせないものでした。

—— 舞台芸術業界のこれからについてどのように思われますか？

やはり舞台から離れてしまったお客様を呼び戻すために、演劇業界が一致団結して取り組めたらいいですね。加えて、今まで演劇を観たことがない新しいお客様にも劇場に足を運んでいただくことも重要です。戦略は各社が様々にお持ちですから、お互いに刺激し合い、日本の演劇業界をまた盛り上げていけたらいいと思います。

一方で世界に目を向けてみると、コロナ禍でいろいろな分断が進む中、ロンドンでは『となりのトトロ』の舞台が人気になるなど、再びアジアに注目が集まっている気がしています。僕は今、国内のことで手一杯です。しかし世界の需要を逃がさずに、日本の演劇業界から一つでも二つでも世界で通用するような作品が生まれ、上演できればいいですよね。海外進出の体力を作るためには国内でまず成功をすることが大前提ですが、その先にはやはり海外へ作品を持っていくことを目指しています。

【取材 2023年1月5日取材 / 文 五月女菜穂】

Interview

株式会社梅田芸術劇場



梅田芸術劇場 シアター・ドラマシティ 内観

梅田芸術劇場 外観

対象公演

宝塚歌劇月組シアター・ドラマシティ公演『ELPIDIO』

2022年12月3日～11日 | 大阪市北区 | 梅田芸術劇場 シアター・ドラマシティ

梅田芸術劇場は2つの劇場を運営し、宝塚歌劇公演を含めたミュージカルの他に演劇・コンサート等、多彩な公演の企画・制作・上演をおこなっている。また宝塚歌劇団出身の所属アーティストのマネジメント業務等も展開。長きに渡り宝塚歌劇とともに歩んできた企画営業部の谷口真也氏に、今回のアートキャラバン対象公演である上記公演を中心に、コロナ禍での対策などを聞いた。

宝塚歌劇団での仕事は「大きな経験」

—— 谷口さんは現在、阪急電鉄から梅田芸術劇場へ出向されていますが、演劇の仕事を始めたいきっかけはなんですか？ また、やりがいに感じていることは？

私は新卒で阪急電鉄株式会社に入社しました。大学時代にストリートダンスをやっていて、みんなで一つのものを作り上げ、それをお客様の前でパフォーマンスをする楽しさを味わってきたので、エンタテインメント事業をずっと希望していたんです。そして、同社のエンタテインメント事業の中核である宝塚歌劇関連の業務を担当することに……。それが「演劇の仕事」の始まりです。

正直な話、業務に携わるまで宝塚の舞台を観たことはありませんでしたが、宝塚での仕事はとても大きな経験でした。特に制作の部門に関わっていたときは、本当にいろいろな人が協力しながら作品を作り上げていることを体感しましたし、私もその一部になれていることが嬉しかったです。初日は

私は舞台を見届けることしかできないのですが、キャストのみなさん、演出家、スタッフの方々とともに初日の幕が明けられた時に達成感を感じますし、この仕事をしていて一番好きな瞬間ですね。

現在、私は梅田芸術劇場に出向しており、宝塚の制作をする立場ではありませんが、梅田芸術劇場としても宝塚を卒業されたOGのみなさんと仕事をすることが多く、これまでのご縁を感じています。

現場は常に緊張感があった

—— コロナ禍における公演の実施状況や心がけたことは？

公私ともに感染防止対策の徹底が一番大変です。人を集めて公演を作るという性質上、「密になるな」というのはなかなか難しい。一方で、公演を上演するためには、やはり感染を拡大させないことが何よりも大切だということも分かるわけです。公演ができないと、公演を作

る仕事の意義を見失ってしまう。なので、どうしても感染防止対策は講じなくてはなりません。マスク着用の徹底、不要不急の外出は控える、食事は黙食をしてもらう、定期的にPCR検査を実施する……。そういった基本的な感染予防対策はとってきました。いつ感染者が出るか分からないですし、公演が中止になるかもしれないという状況下ですから、現場には常に緊張感がありましたし、今もその状態は終わることなく続いています。加えて、感染した場合の待機期間や濃厚接触者の定義など、日々変わり続ける情報をキャッチしながら、万が一の事態に備えた体制を整えてきました。梅田芸術劇場は自社で企画制作を行いつつも、劇場を運営している立場として単独主催だけでなく共催や貸館等、様々な公演形態で上演をおこなっているため、制作元の団体様の考えや対策をヒアリングしつつ、対応を連携させる必要がありました。先方によっていろいろなケースがあるので、梅田芸術劇場としての考えを主張すべきところは主張しつつ、各々のケースにあわせて柔軟に対応してきたと思います。

—— 『ELPIDIO』ではどのような感染予防対策をとられましたか？ お客様からの反響も合わせて教えてください。

本作はKAAT 神奈川芸術劇場で開幕し(2022年11月21日～27日)、次に梅田芸術劇場で上演しました(同年12月3日～11日)。KAATでは無事に全公演上演できたので、梅田芸術劇場でも全公演が上演できるように感染予防対策には気をつけていました。世間では日に日に感染者が増えている状況だったので、現場には緊張感がありましたね。いつPCR検査をするのか。その結果はいつ出るのか。もし公演が止まるようなことがあったら、いつどのようにお客様にお知らせをして、誰とどう連絡を取り合うのか。そういったシミュレーションは稽古が始まった段階から細かく行っていました。

周りを見渡せばこれまで公演中止になってしまう作品もあったなか、本作はなんとかすべての公演を行うことができました。宝塚の作品は、本拠地である宝塚大劇場や東京宝塚劇場での公演ももちろん魅力的なのですが、それ以外の劇場で行われる公演も面白いんです。宝塚大劇場や東京宝塚

劇場よりも出演者が少ない分様々な方にスポットが当たりますし、特に若手が非常に活躍しますので、全体的にとってもパワフルな舞台になっています。梅田芸術劇場で行われた『ELPIDIO』でも「みんなで最後まで公演をしよう」という気概が感じられ、それがお客様にも伝わったと思います。

ネットワークは“1つの希望”のようなものだ

—— 緊急舞台芸術ネットワークに参加されたことで、横の繋がりがネットワークを持つ意義をどのように感じていますか？

きっと緊急舞台芸術ネットワークの事務局の皆さんは繋がるためにいろいろと苦心されていると思いますが、この業界で働いている者にとって、緊急事態舞台芸術ネットワークは“拠り所”であり“1つの希望”のようなものではないかと思っています。誰も経験したことがないコロナ禍という未曾有の状況下ですから、時に何かを交渉したり、時に何かと戦ったりしなくてはいけない時があります。そんなときに、緊急事態舞台芸術ネットワークという横のネットワークがあること。それだけで心強いんです。きっとこの業界にいる皆さんもそう感じているのではないのでしょうか。

—— 舞台芸術業界のこれからについてどのように思われますか？

こういう大変な時代ですが、芸術や舞台公演は、やはり人生を豊かにしたり、感情を動かしたりしてくれる大切なものだと私は思うんです。より多くの人がそう感じていただけるように、私自身も精進していきたいです。その中で宝塚の公演については、自分がもともと制作に関わっていたということもあって、強い思いがあります。女性の出演者だけで夢の世界をお届けするという唯一無二の組織だと思いますし、公演から感じられる一体感やパワーは本当に素晴らしいと思うので、もっともっと世の中の皆さんに知っていただけたら嬉しいです。

[取材 2022年12月27日取材 / 文 五月女菜穂]



企画営業部 谷口真也 (たにぐち・しんや)

2005年阪急電鉄株式会社入社。エンタテインメント事業本部に配属され宝塚歌劇関連の業務に従事。宝塚大劇場・東京宝塚劇場での業務を経て、2015年に宝塚歌劇団に出向し、プロデューサーとして制作業務を行う。その後2020年に株式会社梅田芸術劇場に出向し、現在は主に自社制作案件を担当している。

Interview

株式会社パルコ



対象公演

『凍える』

2022年12月3日～4日 | 福岡県北九州市 | 北九州芸術劇場 中劇場
2022年12月10日～11日 | 沖縄県那覇市 | 那覇文化芸術劇場 なはーと



撮影：細野晋司 写真提供：株式会社パルコ

2023年に開場50周年となるPARCO劇場。様々な文化やアートの発信地として数々の舞台を送り出してきたPARCO劇場で30年に渡りエンターテインメントの第一線として活動してきた株式会社パルコ演劇事業担当の佐藤玄ゼネラルプロデューサーに、90年代小劇場ブーム時の演劇との出会いや、これからの期待を聞いた。

大学時代はスタッフとして活動

—— 演劇との出会いについて教えてください。

京都の同志社大学で、学内のサークル「第三劇場」に顔を出したことが演劇との出会いです。出身が長野のため、入学当初は関西の言葉が少し苦手だったのですが、「第三劇場」では標準語での会話がデフォルトで、居心地が良かったのかもしれません。当時はつかこうへいさんの影響で学生演劇が大ブームだったこともあり、学内の小ホールでの公演でも1公演で2,000人くらいのお客さんが観に来てくれる時代。そんな熱気の中、4年間、音響や制作のスタッフとして公演を裏側から支えていました。

—— 卒業後はすぐ演劇プロデューサーに？

学生時代にどっぷり浸かった演劇関係の仕事をつかしてみたいと、PARCO劇場を有するパルコに入社しました。

最初の2年間で渋谷CLUB QUATTROの企画・運営等に関わり、次の2年間は渋谷PARCOの宣伝や販促の業務に携わり、入社5年目で劇場部(現・エンターテインメント事業部 演劇事業担当)に異動となってからは、約30年、演劇作品のプロデュースをしています。

—— 舞台芸術に携わる中での喜びってなんでしょう。

演劇の制作に関わるようになった1992年に三谷幸喜さんとの出会いがあり、同年、渋谷のPARCO SPACE PART3で『12人の優しい日本人』を三谷さん念願の四方囲みの舞台形式で上演しました。そのご縁もあり、三谷さんご自身が「毎年、新作を上演したい」とご提案くださって、三谷幸喜さん作・演出の様々な名作をPARCO劇場から世に送り出したことは大きな喜びのひとつです。

また、PARCO劇場では芸術監督を置いていないため、各プロデューサーが特定のカラーにとらわれることなく、自由

に公演の企画を立てることが可能です。そういった土壌で、才能ある劇作家や演出家と長期に渡って同じくらみを共有し、関係性を築きながら継続的に作品を作る事ができるのも、パルコでの仕事の醍醐味だと考えています。

観客の声にならない声を体感

—— 今回「日本の演劇」未来プロジェクトに参加されていかがでしたか。

対象公演『凍える』の最終上演地は沖縄の「那覇文化芸術劇場 なはーと」でしたが、沖縄県は他の地域と比べ、舞台装置のフェリー輸送費など、公演の経費がどうしても割高になってしまいます。そういった事情もあり、本州発の舞台作品……特に翻訳劇が上演されることが少ない地域である中、英国の劇作家が現代の病巣を描き、沖縄と縁の深い栗山民也さんが演出を手掛けた『凍える』を上演できたことに大きな意義があると感じています。

—— 『凍える』は人間の深い心理を突いた濃密な会話劇でした。

演劇を通して社会を知るきっかけになる作品だとも思います。コロナ禍での公演ですから、沖縄公演でもお客様にはマスクを着用してご観劇いただきましたが、カーテンコールでの万雷の拍手に加え、「うわあっ！」という声にならない1,000人の声……のようなものが劇場中を満たした瞬間は忘れられませんし、沖縄の客席からは特に高い熱量を受け取りました。坂本昌行さん、鈴木杏さん、長野里美さん3人の出演者も同じ気持ちだったようで、大千秋楽の幕が下りた後も客席の熱の余韻をしばらくまとっていらっしゃいました。

—— 今回の公演で気を付けたことなどあれば教えてください。

『凍える』は出演者が3人、かつ、同じ場面で台詞を語る登場人物は1人か2人という戯曲構成ですので、現場での消毒、検温などの感染予防対策に加え、できる限り少人数で稽古に臨みました。2022年末の実感ですが、特にストレートプレイは誰が出演するかに重きを置いてチケットを購入するお客様も多く、体調不良になったキャストに替わって代役

エンターテインメント事業部演劇事業担当 ゼネラルプロデューサー 佐藤玄(さとう・げん)

1963年、長野県出身。同志社大学法学部在学中、演劇サークル「第三劇場」で過ごす(音響・制作)。1987年、株式会社パルコ入社。3年間音楽映像部に在籍(ライブハウス「クラブクアトロ」の企画・ブッキングに携わった後、2年間パルコ渋谷店営業部にて宣伝・販促を担当。1992年劇場部(現・演劇事業担当)に転属。以後、PARCO劇場の企画・制作を中心に、他会場でのパルコ企画・製作公演も含め年間3~4作品をプロデュース。劇場部課長、劇場部チーフ・プロデューサー、演劇事業担当の部長を経て2021年より演劇事業担当ゼネラルプロデューサー。



の方に本番の舞台に立っていただくのはなかなか厳しい状況です。

—— 様々な地域で公演を実施するにあたり、特に強く感じたことや、お気づきの点などありましたら伺えますか。

舞台の地方公演の場合、一部のスタッフワークを現地の方をお願いすることも多いのですが、コロナ禍で仕事ができなくなり、演劇やライブエンターテインメントの世界から離れてしまったスタッフさんやアルバイトの方が大勢いらっしゃることを今回のツアーでも実感しました。今後、立て直しが必要な課題ではないでしょうか。

新しい形の舞台映像に期待

—— 今後の舞台芸術業界への期待などもぜひ。

今、業界全体が本当に大変だと身をもって感じています。コロナ禍前ならば先行販売の時点でほとんどのチケットが売れたような作品でも、今は券売に苦戦することも多いですから。コロナ禍でテレビドラマなどのスケジュール確定が後ろ倒しになる中、映像で活躍する俳優さんを舞台公演にキャスティングするのがなかなか困難な現状もありますし、連日の公演中止や延期のニュースを見て無事に幕が開くのか不安な気持ちを抱え、筆が進まない劇作家の方もいらっしゃいます。

そういった厳しい状況の中、記録として演劇作品を映像で残すことにひとつの希望がある気もしています。舞台『アルキメデスの大戦』(2022年)をホールで8Kの映像で鑑賞した際に、まるですぐそこに演者が存在しているような臨場感・没入感を体験し、それまでの舞台録画配信とは異なる可能性を受け取りました。演劇はライブエンターテインメントなので、「生(なま)」であることに大きな価値があるのは間違いありませんが、撮影や編集等にかかる費用などの問題をクリアして、良質な舞台の映像を8Kで残していければ、舞台芸術業界に新しい道が拓ける可能性もあると感じています。

[取材 2022年12月23日 / 文 上村由紀子]

Interview

株式会社キューブ



撮影：引地信彦

対象公演

KERA・MAP#010『しびれ雲』

2022年12月8日～11日 | 兵庫県西宮市 | 兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール

これまで月に約1演目ほどのペースで様々な舞台を制作してきた株式会社キューブ。コロナ禍でいくつもの上演中止を経験しながらも、2022年の年末に感染者が増加するなかで行われたKERA・MAP『しびれ雲』は、東京・兵庫・九州・新潟と全国4か所で上演した。いつしか舞台に魅せられ、会社を立ち上げた北牧裕幸社長に話を伺う。

得も言われぬ感情が湧き上がる理由が知りたくて

—— 演劇の仕事を始めた経緯は？

私は早稲田大学文学部に通っていたので、演劇をやっている友人が周りに多く、それが演劇に最初に触れるきっかけだったと思います。大学時代はつかこうへいさんの芝居に大変はまりまして、バイトで稼いだお金をチケット代に注ぎ込んでいました。毎日同じ芝居を観ても、何かしら、得も言われぬ感情が湧き上がってきて、泣いてしまう。その理由が知りたくて、また劇場に通っていましたね。夢の遊眠社、黒テント、紅テントなども観て、大学の卒論は寺山修司さんをテーマにしました。そうしてだんだんと舞台関係者との繋がりができていきました。

大学卒業後は、レコード会社に勤めて制作ディレクターをしていました。その中で、劇団☆新感線の羽野晶紀さんのレコードデビューに携わったことがあって、新感線のメンバーや、劇団そばこまちや南河内万歳一座といった当時盛り上がっていた関西学生演劇との接点ができたんです。その流れで、音楽・芝居・映像の制作をマネジメントから制作・宣伝まですべて一貫してやる会社をつくらうという話になり、1997年にキューブを起業。本格的に芝居の制作に携わるようになりました。

—— 演劇の仕事のやりがい？

あらゆるライブエンターテインメントにあてはまることですが、すべてが一期一会で、その時にしか成立しないカルチャーであること。それが一番の魅力だと思いますね。演じている側だけでなく、劇場にお越しになっているお客様

にとっても毎回毎回違う舞台になっているわけですが、その中でどんな感動を生み出すことができるか。大変楽しみに感じています。

2020年、21年はあらゆることが止まった

—— コロナ禍における公演の実施状況は？

2020年2月26日に行われた安倍晋三元総理の会見（※感染リスクを勘案し、多数の方が集まる文化イベント等へ中止や延期等を要請した）を受けて、舞台業界はすべてがピタッと止められてしまったわけです。本当にあらゆることが2020～21年に止まってしまった。収入は8割減。弊社のみならず、業界の皆さんが苦労されたのではないかと思います。その中でもできることをしていこうと最大限の努力はしてきたのですが、やはりお客様の心情として「コロナ禍に芝居を観に行く」というハードルは高く、動員の回復になかなか繋がらなかったと感じています。コロナ禍においては、まずは生命の安全が一番優先されました。安全が確保された上で「何のために生きるのか」ということを考えるとやはり日々の楽しみという意味でのエンターテインメントが必要になってくると思うのですが、コアな演劇ファンは早々に戻ってきてくださったとしてもライトな演劇ファンの戻りは遅く、まだまだ回復していないと感じています。

—— 「日本の未来」プロジェクトに取り組みされている理由や反響は？

やはり緊急事態舞台芸術ネットワークの方々とともに、日本の演劇文化ひいてはライブエンターテインメント全体を未来に残していきたいという思いがあるからです。演劇の灯あるいはライブエンターテインメントの灯をコロナで消してはいけないし、灯し続けていくための種火を残すために、経産省や文化庁から予算をいただきアートキャラバン事業やARTS for the future!などの施策が行われていると理解しています。今回の対象公演は、弊社に所属する劇作家ケラリーノ・サンドロヴィッチによる『しびれ雲』。ケラはコロナ禍であっても創作を続けてきましたが、やはりツアー公演は移動もしますし、追記の感染予防措置を講じる必要があり、いろいろとリスクが大きかったんですね。

代表取締役社長 北牧裕幸（きたまき・ひろゆき）

1959年、新潟県長岡市生まれ。1978年、早稲田大学第一文学部入学。1984年に同大学大学院国語国文学専攻科を修了後、株式会社キャニオンレコードに入社。1997年の退職まで制作部にディレクターとして勤務する。1997年6月に、株式会社キューブを設立。同社代表取締役社長に就任し、現在に至る。



その部分をアートキャラバン事業にご支援いただいて、兵庫公演（2022年12月8日～11日、全5公演）を行うことができました。東京からカンパニーがやってくる頻度が減っていたこともあって、地域のお客様には大変喜んでいただけたと聞いております。

日本の演劇を残すために、大同団結

—— 横の繋がりやネットワークを持つ意義をどのように感じていますか？

明治以来、日本の近代演劇がうまれてから脈々と続く歴史の中で、演劇を残すためにあらゆる主義や政治信条などを乗り越えて大同団結することは、今までなかったといっていいでしょう。文化を継承・育成していく上で、垣根を越えて繋がっていくことは素晴らしいことだと思います。

一方で、諸外国に比べると、まだまだ遅れているなど感じる政策や施策もあります。業界の事情をお伝えすることで、政府と向き合いながら、有効な支援をしていただく。そのための繋がりができたという点でも有意義だと感じています。

—— 舞台芸術業界のこれからについてどのように思われますか？

コロナ前に戻るということではなく、コロナを経て、日本の文化振興策が新しいフェーズに進んでいけるか、それがこれから問われるでしょう。

日本の演劇というのはドメスティックな文化だと思われていて、それでよとしていた風潮も確かにあります。しかしここからは日本の演劇も海外に出ていったり、インバウンドの方々を観ていただくための施策を考えたりする必要があると思います。

僕らもエンターテインメント産業が日本の産業振興における柱になるんだということを主張をしていかなければいけないと思いますし、政府にそれを理解をしていただくために頑張っていきたいです。

[取材 2022年12月26日 / 文 五月女菜穂]

Interview

東宝株式会社



『4000マイルズ～旅立ちの時～』



『ジャージー・ボーイズ』

対象公演

『ジャージー・ボーイズ』

2022年12月10日～11日 | 神奈川県横須賀市 | 横須賀芸術劇場大劇場

『4000マイルズ～旅立ちの時～』

2022年12月12日～28日 | 東京都千代田区 | シアタークリエ

東宝株式会社は毎月3～4本の舞台を手掛け、そのジャンルは多岐にわたる。2022年は本事業の対象であるミュージカル『ジャージー・ボーイズ』と舞台『4000マイルズ～旅立ちの時～』ともに全国公演もおこなっている。今回、『ジャージー・ボーイズ』を担当する今村眞治プロデューサーに、今の時代に舞台公演に携わる思いを伺った。

きっかけは『ガラスの仮面』

—— 今村さんが舞台芸術にかかわるきっかけを教えてください

最初に演劇に興味を持ったきっかけは、妹が持っていた漫画『ガラスの仮面』を読んだことです。そこから映画監督を目指して東宝に入社しましたが、企業にいる限りその目はないと言われてまして(笑)、テレビを中心に映像畑で仕事をしました。その後、2007年のシアタークリエ開場の際、映像に強い人材が欲しいという演劇部からの希望もあり、異動して本格的に演劇やミュージカルの現場にかかわるようになった次第です。異動後は勉強も兼ねてブロードウェイやウエストエンドの舞台もたくさん観劇させていただきました。のちに日本初演のプロデュースを担当するミュージカル『ジャージー・ボーイズ』は、ブロードウェイの開幕から1年後くらいに現地で観て感動した作品のひとつです。

—— 映像の現場と舞台の現場、1番の違いは何でしょう
演劇で“第4の壁”(舞台上と観客とを隔てる見えない壁を表す言葉)という表現がありますが、僕個人はむしろ舞台上の熱量がダイレクトにお客様に伝わり、それがそのまま演者にフィードバックされることが演劇やミュージカルの醍醐味だと思っています。映像は視聴者の反応を製作サイドがリアルタイムに受け取ることが難しいので、その点が舞台との大きな違いでしょうか。舞台の公演中に劇場の1番後ろにいと、お客様の拍手の熱がすべての答えなのだ実感します。

愕然としたコロナ禍での変化

—— コロナ禍で多くのことが変わりました

プロデューサーとして強い危機感を抱いたのが、お客様が劇場に来ていただくハードルがぐんと上がったことです。これまで「おもしろそうだから観てみようかな」とチケット

を買ってくださっていた、いわゆるライト層の足が如実に劇場から遠ざかりました。僕はコロナ禍以前からいかにライト層を劇場に呼び込めるかが今後の演劇業界のひとつのキーポイントだと考えていましたので、この状況には打ちのめされました。また、稽古場を含めた現場の疲弊は大きく、1番多い時は毎日のようにPCR検査を実施していましたし、誰も悪くないという共通認識がありつつ、自分が陽性者となったことで公演が中止になってしまった俳優さんが受けるメンタルのダメージは想像もできないほどの大きさでした。そのあたりのケアをどうしていくのかも今後の課題だと思っています。

—— そんな中、『ジャージー・ボーイズ』は新たなキャストを迎えて走り出します

フランキー・ヴァリ役はオリジナルキャストの中川晃教さんが2016年の初演から毎公演ひとりで演じてきましたが、今回からDa-iCEの花村想太さんにも同役を担っていただきました。これはいろいろな意味で本当に良かった。中川さんもコロナ禍での体調管理を含め、つねに張りつめていた精神状态から少し解放され、歌唱にもこれまでにない艶(つや)が出たと思いますし、花村さんの登場で作品に新たな視点が生まれたとも感じます。

—— 『ジャージー・ボーイズ』は10月の東京公演を皮切りに各地方を巡演しました

2018年に続き12月初旬には演出・藤田俊太郎さんの地元、秋田でも公演しています。ここでの客席の熱量は特にすさまじいです。まず拍手のタイミングがほかの地方とは違って、曲の途中だけでなくストーリーの盛り上がり箇所でもパチッと飛んでくる。「お客様、事前に全員で練習したの?」というレベルの拍手が劇場中に鳴り響く様子にキャストもスタッフも大感動でした。なかなか秋田で東京発の舞台が上演される機会も少ないので、劇場全体から歓迎ムードが漂っていて、僕たちも胸がアツくなりました。お客様の勢いをエネルギーに、今年の最終公演地となる12月の横須賀公演を2022年版『ジャージー・ボーイズ』の集大成としてお届けしようと思いました。

演劇部 企画製作グループ プロデューサー室 チーフプロデューサー
今村眞治 (いまむら・しんじ)

1993年東宝株式会社入社。テレビ部(企画制作)、映画宣伝部(宣伝企画室 パブリシティ室)を経て2006年演劇部に配属。『プリシラ』『キューティ・ブロード』ほか多くの舞台を手掛け、2016年『JERSEY BOYS』は第24回読売演劇大賞最優秀作品賞、菊田一夫演劇賞、ミュージカルベストテンWOWOW勝手に演劇大賞など受賞。2018年再演でミュージカルベストテン優秀再演賞受賞。2020年『天保十二年のシェイクスピア』は第28回読売演劇大賞優秀作品賞、最優秀演出家賞(藤田俊太郎)、優秀スタッフ賞(作曲)をそれぞれ受賞。



横のつながりと配信の可能性

—— 小劇場含め、演劇界の横のつながりをどう感じていますか?

僕自身、イキウメの作品が大好きでよく観ますし、特にシアタークリエでは小劇場で活躍する演出家の方と創る意欲的な作品も多いです。また、感染症対策をはじめ、なにをどうしていいのかわからなかったコロナ禍初期のころに、緊急事態舞台芸術ネットワークに参加する他主催会社の方たちとさまざまな情報交換ができたのはありがたかったですね。その行き来が小劇場や大手主催といった公演形態やジャンルを問わず、もっと活発に行われたらさらにおもしろいことができるような気がします。

—— 今後の舞台芸術への期待や展望など教えてください
やはり僕は舞台芸術の1番の魅力は“第4の壁”を突き抜けて俳優の生(なま)の感情が劇場中を駆け巡ることだと思うんです。ただ、今の状況でそれを成立させるためには以前より多くの時間とコストがかかってしまう。さらに海外作品に関しては、円安の影響もあって日本での上演権なども実質値上がりしています。それらのことを鑑みると、配信は多くの人に舞台芸術に触れてもらう手段として大いにアリだと感じます。

たとえば、昔プロ野球やサッカーがテレビ中継されていた頃、テレビで観戦していた人たちが「実際に選手のプレイを体感したい」と球場に行くことがありますよね。舞台もそれと同じで、魅力的な作品を配信すれば、視聴した人たちが劇場に足を運んでくれるきっかけになるかもしれない。少し言葉が難しいのですが、コロナ禍で唯一良かったと思えることが演劇界での配信の活発化です。いろいろクリアしなければならない課題が多い事情は理解しつつ、より多くの人に文化を届ける手段として、良質な舞台作品の製作とともに、配信のさらなる可能性も今後は探っていきたいです。

[取材 2022年11月17日 / 文 上村由紀子]

Interview

株式会社明治座



対象公演

ミュージカル『チェーザレ 破壊の創造者』

2023年1月7日～31日 | 東京都中央区 | 明治座

2023年で創業150周年となる明治座。伝統の味を食堂や客席で楽しめたり、近年では歌舞伎、時代劇、歌謡ショーのほかミュージカルも上演し、今事業対象の『チェーザレ 破壊の創造者』では初めてオーケストラピットを使用した。伝統と革新の両輪を大切にしている明治座の三田光政専務取締役は、コロナ禍での上演や今後について伺った。

劇場は身近な場所だった

—— 演劇とご自身との出会いについて教えてください。

明治座の運営が家業の一つということもあり、幼い頃より劇場は身近な場所でした。幼少時より喜劇役者・三木のり平さんの舞台は良く拝見していましたし、妹たちが歌舞伎とご縁の深い藤間流で日舞を習っていたこともあり、歌舞伎や日本舞踊の世界にも早くから馴染んでおりました。中学入学以降は、現代演劇やミュージカルの舞台にも足を運ぶようになり、現在も様々な作品を拝見しています。

—— ご自身の観劇体験で、特に衝撃を受けた作品などありましたらぜひ。

仕事として舞台芸術に携わるようになってからは、歌舞伎役者さんご出演の舞台を観る機会が特に多かったように思

います。中でも市川染五郎さん(現・松本幸四郎)が劇団☆新感線に客演なさった『アテルイ』(2002年)や『朧の森に棲む鬼』(2007年)は作品自体も素晴らしかったですし、染五郎さんがお父様の松本幸四郎さん(現・松本白鸚)とは違う道を切り拓かれようとする姿や熱意が客席まで伝わり、強く胸を打たれました。

—— 今のお仕事をなさる上での喜びって何でしょう。

コロナ禍で演劇が不要不急と言われた中、劇場でお客様が喜んでくださるお姿を拝見することが何よりの喜びです。ご来場が叶わない方のためにも配信やテレビ番組で提供される舞台作品は必要ではありますが、演劇はまったく同じものが二度と再現されない芸術。観劇やお食事などの体験が、明治座で過ごして下さったお客様の心に思い出として刻まれますことが私どもの幸いです。

3年の時を経ての上演

—— コロナ禍でいろいろなことが変わりました。

政府から2020年2月26日に出された公演中止要請を受けての上演中止や延期で、経済的なことを含め、非常に大きなダメージを受けました。同年3月に公演を予定していた歌舞伎は初日を複数回延期して稽古を進めていましたが、最終的に上演は叶わず、稽古場が撤収された時の何とも言えない気持ちを今でも覚えています。また、4月に予定していた舞台は、衣装付きの通し稽古実施後に中止が決まりました。結局、明治座は2020年3月から7月まではほとんどの公演を取りやめ、チケット払い戻しの対応を取らせていただいたのですが、公演に関わってくださるスタッフさん達のご理解は劇場としても守らなければいけませんので、ある程度の金銭的保障をする措置を取りました。

—— 「日本の演劇」未来プロジェクトに参加していかがでしたか？

対象であるミュージカル『チェーザレ 破壊の創造者』は、本来、2020年に公演を実施する予定でしたが、コロナ禍で一旦中止を余儀なくされ、今回、3年の時を経ての上演が叶いました。企画を含めたオリジナルミュージカルの製作準備自体は2015年頃より進めており、そこには日本の大劇場で上演されるミュージカルの多くが海外発の作品に頼っている状況への危惧もありました。海外で製作された作品の翻訳上演ばかりになってしまいますと、国内のクリエイターが育ちませんから。そこで、惣領冬実先生の同名漫画を原作に、明治座初のオリジナルミュージカルをゼロから創作することを決め、主演の中川晃教さんをはじめ、様々な俳優、クリエイターの皆さんとともに長い時間をかけて打ち合わせや稽古を進めて参りました。一旦の中止を経てあきらめずにカンパニーがまた集結し、お客様にこの作品をご覧いただいたことを奇跡のようにも感じていますし、若い出演者やスタッフを含む私達の新たな挑戦を補助という形で応援して下さったことには感謝しかありません。おかげさまで『チェーザレ 破壊の創造者』のお客

様は20代から40代と通常の明治座公演よりも若い年齢の方が多く、新たな観客層の掘り起こしにも繋がったと考えています。

—— お稽古や公演中に特に気を付けたことなどあれば教えてください。

劇場入り口にはサーモグラフィの体温測定器や消毒装置を設置し、お客様にも感染防止対策にご協力いただいております。稽古場ではこまめな消毒や換気に加え、PCR検査の実施、部屋に入る人数の縮小などを徹底しました。それらの感染症対策を取った上で『チェーザレ 破壊の創造者』公演中は、作品の舞台であるイタリアに関連するお食事やスイーツ、グッズなどでも楽しんでいただけるよう、劇場関係各部署が趣向を凝らしお客様をお迎えました。

作品の海外輸出も視野に

—— 今後の舞台芸術業界への期待や希望などお聞かせいただけますか。

映画やテレビが世の中に登場した時、舞台は減るだろうと言われました。ですが、その二つが台頭しても演劇は減りだしていません。それは目の前で俳優が生(なま)の感情を放出し演技をする舞台芸術に人間は根源的なところで惹かれるからだと思います。現時点で演劇業界は厳しい状況が続いていますが、今後、国内だけに目を向けるのではなく、海外に輸出できるような作品を創出していくことも今の状況を打開する一つの方法かもしれません。

私は技術の進歩が舞台作品のクオリティに必ずしも直結するとは考えておらず、あくまで演劇の芯にあるのは物語の力とそれを演じる俳優の熱量だと思っています。その芯の部分を製作側である私達が信じ、良質な作品を創作していけば、舞台芸術は今後も多くのお客様に支持されていくのではないのでしょうか。

[取材 2023年1月19日 / 文 上村由紀子]

専務取締役 三田光政(みた・みつまさ)

1980年、東京都生まれ、2003年株式会社電通入社、2012年株式会社明治座入社。宣伝部長、総務部長、制作部長などを経て、現在、専務取締役。近年のプロデュース作品。ミュージカル『チェーザレ 破壊の創造者』、三銃士企画・音楽劇『歌妖曲～中川大志之丞変化～』、三銃士企画『両国花錦闘士』、舞台『ゲゲゲの鬼太郎』、舞台『サザエさん』など。



「日本の演劇」未来プロジェクト2022 対象公演のツアー日程

日程	会場	会場所在地	備考	本事業 対象公演
阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇) 宝塚歌劇雪組宝塚パウホール公演「Sweet Little Rock 'n' Roll」				
2022年1月14日(金)～1月25日(火)	宝塚パウホール	兵庫県		●
阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇) 宝塚歌劇星組全国ツアー公演「モンテ・クリスト伯/Gran Cantante!!」				
2022年9月1日(木)～9月4日(日)	梅田芸術劇場 メインホール	大阪府		
2022年9月7日(水)～9月8日(木)	札幌文化芸術劇場hitaru	北海道		
2022年9月10日(土)	松戸・森のホール21	千葉県		
2022年9月11日(日)	和光市民文化センター	埼玉県		
2022年9月13日(火)	金沢歌劇座	石川県	公演中止	
2022年9月14日(水)	オーバード・ホール	富山県	公演中止	
2022年9月16日(金)～9月21日(水)	相模女子大学グリーンホール	神奈川県	一部公演中止	●
阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇) 宝塚星組宝塚パウホール公演「ベアタ・ベアトリクス」				
2022年9月8日(木)～9月19日(月)	宝塚パウホール	兵庫県		●
阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇) 宝塚歌劇花組宝塚パウホール公演「殉情」				
2022年10月13日(木)～21日(金)、 10月30日(日)～11月7日(月)	宝塚パウホール	兵庫県		●
阪急電鉄株式会社(宝塚歌劇) 宝塚歌劇花組全国ツアー公演「フィレンツェに燃える」[Fashionable Empire]				
2022年10月14日(金)～10月17日(月)	梅田芸術劇場 メインホール	大阪府		
2022年10月21日(金)～10月23日(日)	神奈川県民ホール	神奈川県		●
2022年10月25日(火)	ホクト文化ホール	長野県		
2022年10月26日(水)	サントミュージゼ上田市交流文化芸術センター	長野県		
2022年10月28日(金)～10月30日(日)	名取市文化会館	宮城県		
2022年11月1日(火)～11月3日(木・祝)	日本特殊陶業市民会館フォレストホール	愛知県		●
株式会社アミューズ ミュージカル「The View Upstairs -君が見た、あの日-」				
2022年2月1日(火)～2月13日(日)	日本青年館ホール	東京都		●
2022年2月24日(木)～2月27日(日)	森ノ宮ピロティホール	大阪府	全公演中止	
エイベックス・エンタテインメント株式会社 ライフ・イン・ザ・シアター				
2022年3月3日(木)～3月13日(日)	新国立劇場 小劇場	東京都		
2022年3月19日(土)～3月21日(月・祝)	サンケイホールブリーゼ	大阪府		●
2022年3月24日(木)	広島 JMS アステールプラザ大ホール	広島県		
2022年3月26日(土)～3月27日(日)	久留米シティプラザ ザ・グランドホール	福岡県		
2022年4月2日(土)～4月3日(日)	道新ホール	北海道		
2022年4月10日(日)	北國新聞 赤羽ホール	石川県		
株式会社ヴィレッチ 2022年劇団☆新感線42周年興行・春公演 いのうえ歌舞伎「神州無頼街」				
2022年3月17日(木)～3月29日(火)	オリックス劇場	大阪府		
2022年4月9日(土)～4月12日(火)	富士市文化会館ロゼシアター 大ホール	静岡県		
2022年4月26日(火)～5月28日(土)	東京建物 Brillia HALL(豊島区立芸術文化劇場)	東京都		●
劇団四季 ライオンキング				
～2022年5月15日(日)	名古屋四季劇場	愛知県	一部公演中止	
ロングラン上演中	有明四季劇場	東京都	一部公演中止	●
劇団四季 リトルマーメイド				
2022年4月2日(土)～5月29日(日)	静岡市民文化会館 大ホール	静岡県		●
2022年7月11日(月)～10月10日(月・祝)	上野学園ホール	広島県		
2022年11月26日(土)～	東京エレクトロンホール宮城	宮城県	2023年3月12日(日)まで/一部公演中止	●
株式会社キョードーファクトリー きかんしゃトーマスファミリーミュージカル ソドー島のたからもの				
2022年2月12日(土)、4月23日(土)	とりぎん文化会館 梨花ホール	鳥取県	全公演中止	
2022年2月13日(日)、4月24日(日)	島根県民会館 大ホール	島根県	全公演中止	
2022年3月26日(土)	東広島芸術文化ホールくらら 大ホール	広島県		
2022年5月4日(水・祝)	カナモトホール	北海道		
2022年5月5日(木・祝)	旭川市民文化会館 大ホール	北海道		
2022年5月22日(日)	中野サンプラザ	東京都		
2022年6月26日(日)	豊田市民文化会館 大ホール	愛知県		
2022年7月9日(土)	神奈川県民ホール 大ホール	神奈川県		
2022年7月30日(土)	箕面市立文化芸術劇場 大ホール	大阪府		●
2022年7月31日(日)	名古屋公会堂 大ホール	愛知県		
2022年10月1日(土)	かめありリリオホール	東京都		

日程	会場	会場所在地	備考	本事業 対象公演
株式会社キョードーファクトリー きかんしゃトーマスクリスマスコンサート ソドー島のメリークリスマス				
2022年11月23日(水・祝)	調布市グリーンホール	東京都		
2022年11月26日(土)	小山市立文化センター	栃木県		●
2022年11月27日(日)	伊勢崎市文化会館	群馬県		●
2022年12月3日(土)	西予市宇和文化会館	愛媛県		
2022年12月4日(日)	西条市総合文化会館	愛媛県		
2022年12月10日(土)	広島化学学園HBGホール(旧広島厚生年金会館)	広島県		
2022年12月11日(日)	アクリエひめじ	兵庫県		
2022年12月18日(日)	まつもと市民芸術館	長野県		
2022年12月25日(日)	厚木市文化会館	神奈川県		
株式会社新歌舞伎座 頭痛肩こり樋口一葉				
2022年9月2日(金)～9月11日(日)	新歌舞伎座	大阪府		●
松竹株式会社 アンタッチャブル・ビューティー ～浪花探偵狂騒曲～				
2022年9月17日(土)～25日(日)	大阪松竹座	大阪府	一部公演中止	●
松竹株式会社 當る卯歳 吉例顔見世興行				
2022年12月4日(日)～25日(日)	南座	京都府		●
株式会社ネルケプランニング 「美少女戦士セーラームーン」30周年記念 Musical Festival -Chronicle-				
2022年11月17日(木)～20日(日)	品川プリンスホテル ステラボール	東京都		●
株式会社博多座 女の一生				
2022年11月18日(金)～30日(水)	博多座	福岡県		●
株式会社御園座 よしもと爆笑公演				
2022年11月22日(火)～11月27日(日)	御園座	愛知県		●
株式会社東急文化村 ツダマンの世界				
2022年11月23日(水・祝)～12月18日(日)	Bunkamura シアターコクーン	東京都		●
株式会社ホリプロ ミュージカル「東京ラブストーリー」				
2022年11月27日(日)～12月18日(日)	東京建物 Brillia HALL(豊島区立芸術文化劇場)	東京都		●
2022年12月23日(金)～25日(日)	梅田芸術劇場 シアター・ドラマシティ	大阪府		
2023年1月14日(土)	刈谷市総合文化センターアイリス 大ホール	愛知県		
2023年1月21日(土)～22日(日)	JMS アステールプラザ大ホール	広島県		
株式会社梅田芸術劇場 宝塚歌劇月組シアター・ドラマシティ公演「ELPIDIO」				
2022年12月3日(土)～12月11日(日)	梅田芸術劇場 シアター・ドラマシティ	大阪府		●
株式会社バルコ 凍える				
2022年10月2日(日)～10月24日(月)	PARCO 劇場	東京都	一部公演中止	
2022年10月30日(日)	いわき芸術文化交流館アリオス 中劇場	福島県	公演中止	
2022年11月3日(木・祝)～11月6日(日)	兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	兵庫県		
2022年11月10日(木)～11月13日(日)	穂の国とよはし芸術劇場PLAT 主ホール	愛知県		
2022年11月16日(水)～17日(木)	まつもと市民芸術館 主ホール	長野県		
2022年11月26日(土)～27日(日)	りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館・劇場	新潟県		
2022年12月3日(土)～4日(日)	北九州芸術劇場 中劇場	福岡県		●
2022年12月10日(土)～11日(日)	那覇文化芸術劇場なはーと 大劇場	沖縄県		●
株式会社キューブ KERA-MAP#10「しびれ雲」				
2022年11月6日(日)～12月4日(日)	下北沢 本多劇場	東京都	一部公演中止	
2022年12月8日(木)～12月11日(日)	兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	兵庫県		●
2022年12月17日(土)～12月18日(日)	北九州芸術劇場 中劇場	福岡県		
2022年12月24日(土)～12月25日(日)	りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館・劇場	新潟県		
東宝株式会社 ジャージー・ボーイズ				
2022年10月8日(土)～10月29日(土)	日生劇場	東京都	プレビュー公演:10月6日(木)～10月7日(金)	
2022年11月3日(木・祝)～11月6日(日)	新歌舞伎座	大阪府		
2022年11月10日(木)～11月13日(日)	博多座	福岡県		
2022年11月26日(土)～11月27日(日)	日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール	愛知県		
2022年12月3日(土)～12月4日(日)	あきた芸術劇場ミルハス	秋田県		
2022年12月10日(土)～12月11日(日)	横須賀芸術劇場	神奈川県		●
東宝株式会社 4000マイルズ～旅立ちの時～				
2022年12月12日(月)～12月28日(水)	シアタークリエ	東京都		●
2023年1月7日(土)～1月9日(月・祝)	梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ	大阪府		
2023年1月11日(水)～1月12日(木)	日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール	愛知県		
2023年1月15日(日)	レクザムホール(香川県民ホール)大ホール	香川県		
株式会社明治座 ミュージカル「チェーザレ 破壊の創造者」				
2023年1月7日(土)～2月5日(日)	明治座	東京都		●

Interview

各地からアーティストが集う『東京キャラバン』×「日本の演劇」未来プロジェクト

2015年から2021年まで各地の自治体や芸術文化団体と連携・協力し、国内外16か所で開催した、文化のサーカス『東京キャラバン』。そのノウハウを生かし、2022年に、東京2020オリンピック・パラリンピックの記念文化事業の一つとして企画された『東京キャラバン the 2nd』が開催された。主催として、地方自治体である東京都、芸術文化の創造・発信・人材育成などを推進するアーツカウンシル東京とともに、緊急事態舞台芸術ネットワークも名を連ねる本事業を、事業担当の浅野五月氏とともに振り返る。

——浅野さんが芸術文化、また『東京キャラバン』に関わるようになったきっかけは？

大学が芸術学部で、とくに舞台セットに興味があり舞台装置を専攻していました。就職は一般企業の広報部でしたが、そこで協賛や支援という形で舞台公演に関わるようになり「もう一度、芸術に関わる仕事をしたい」と思い今の財団に入りました。広報として携わった事業を通して様々なアーティストの方々と一緒に、その後、アーツカウンシル東京の広報担当になり、2015年にスタートした『東京キャラバン』に関わりました。本格的に事業担当となったのは、翌2016年からです。

——『東京キャラバン』は新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けて2020年・2021年に中止し、2022年度に『東京キャラバン the 2nd』として開催されました。the 2ndとしての特徴やこだわりは？

中止が続いたままプログラムが終了してしまい、「これで終わってしまうのか」という不完全燃焼感がありました。けれども、新たな事業として、the 2ndが開催できることになりました。

『東京キャラバン』は「人と人が交わるところに文化が生まれる」というコンセプトのもと、全国から様々なアーティストが集まります。公共性を強く意識し、本事業では今まで関わりのなかった方々が出会い、互いの文化に触れていただくことを狙いの一つとしています。あまりにもジャンルが広いので、私も知らない事が多くありました。たとえばアイヌの方々をはじめ皆さんには大事にしてきた作法などがあるということも、一つひとつ教えていただきました。その際、開催地の自治体の方々が間に入ってご紹介やご調整をくださったことで、プロジェクトを円滑に進めることができました。地元のことは地元の方に聞くのが一番ですね。感染症対策も、自治体の方々とアーティスト、スタッフと一丸になって取り組めたことで、幸運にも感染者を出すことなく開催できました。

前身の『東京キャラバン』で培ってきたものや、スタッフ・クリエイターの方々との関係性をさらに発展させて、新しいものとして皆で新たなステップを踏めた感覚があります。

浅野五月(あさの・さつき)

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 事業部 事業推進担当係長

金融機関を経て、2010年に財団入団。トーキョーワンダーサイト(現TOKAS/東京都現代美術館)、東京文化発信プロジェクトその後、アーツカウンシル東京に配属。2016年から2021年まで、東京2020オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導する東京都のリーディングプロジェクトを担当し、「東京キャラバン」に携わる。2022年、「東京キャラバン the 2nd」を担当。



——2015年から開催されてきた『東京キャラバン』ですが、今回「日本の演劇」未来プロジェクトに参加してみて変化や影響などはありましたか？

これまでの『東京キャラバン』は自治体との共催で実施していました。今回、自治体ではない公益セクターの方と一緒させていただくことにとっても緊張しましたし、公共的な目標を前面に掲げた取組みにより多くの方が関わり、認めていただけるような仕組みにしていけるにはどうしたらいいのだろうか、とすごく考えました。

そのうえでパフォーマンスを、事務局や他の企業の方々にご覧いただいたことは励みになりました。参加アーティストの方々にとってもスタッフにとっても大変意義深いことだったと感じています。さらには6年ぶりの東京開催ということもあって、来場者の方から「初めて観に来ました」という声もたくさんあり、目指していた「いろんな芸術や文化が混ざり合い融合している姿」を共有できたことが一番大きな成果です。

——芸術文化の推進に携わる視点から、今後の芸術文化の展望や希望を聞かせてください。

『東京キャラバン』を通じて、過去に参加されたアーティストの方々の中でネットワークができていて、それぞれで『東京キャラバン』と同じような取り組みを実施してくださっているんです。出会いや横のつながりで、皆さんの活動が広がっていることはとても素敵なことだと思います。来場者の方からも「新しいジャンルを知りました」という声があり、集まることと出会うことの2つによってネットワークって広がっていくんだと実感しています。こうやって気軽に、様々な芸術文化に関わる一流の方々に触れ合えていただく機会は、行政だからこそ作れる機会だと思います。『東京キャラバン』自体は2022年度で終了ですが、行政が実施する事業としては、とくにこれからを担う若い方々に来ていただき、新たな出会いの場になるような事業が増えるといいと思っています。

11月の静岡公演、12月の東京公演どちらも来場者の方々に大変好評でした。静岡でも東京でも、地域に関わらず来場者の反応や出会いへの喜びに変わりはないとあらためて目の当たりにしました。



日本全国から様々な背景のアーティストやスタッフが参加します。求められるものがそれぞれまったく違うので、私も皆さんのご要望をなるべく叶えたいという姿勢で臨みました。終わってみると、関わった皆さんの情熱と寛容さで成り立っていたととても感謝しています。

撮影：岡本隆史



東京キャラバン the 2nd

東京公演

2022年12月15日(木)～17日(土)

豊島区 | 池袋西口公園野外劇場グローバルリングシアター

【演出】野田秀樹(劇作家・演出家・役者)

【参加アーティスト】前田敦子(女優)、浅草ジント(ミュージシャン)、REG☆STYLE(ダブルダッチチーム)、沢則行(人形劇師)、宇治野宗輝(アーティスト)、花柳貴伊那(日本舞踊家)、「東京キャラバン」アンサンブル(石川詩織、上村聡、川原田樹、末富真由、手代木花野、間瀬奈都美、松本誠、的場祐太、水口早香、吉田朋弘)、琉球舞踊(立方:玉城匠、上原崇弘 地謡:玉城和樹、仲嶺良盛)、公益社団法人北海道アイヌ協会(アイヌ古式舞踊)、静岡県立横須賀高等学校郷土芸能部(三社祭礼囃子)

【参加クリエイター】鈴木康広(美術)、原摩利彦(音楽)、ひびのこづえ(衣装)、赤松絵利(ヘアメイク)、青木兼治(映像撮影)

【主催】東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク

【後援】静岡県、豊島区 【連携】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場 【協賛】キャンメイク、CEZANNE、ROSYROSA

一般社団法人 緊急事態舞台芸術ネットワーク

2020年2月26日に政府による突然の自重要請を受けて以来、公演の中止延期が相次いだ舞台芸術界の損害の実態を把握するため、4月14日に緊急損害額調査 (<https://jpasn.net/cn1/2020-05-14-2.html>) を実施。

その結果を受けて、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) による舞台芸術業界が危機的状況であるとの認識のもと、5月14日に緊急的な対応を目的とした、緊急事態舞台芸術ネットワークを立ち上げ (参加団体42、賛同団体12)。

7月1日、業種別ガイドラインとなる「舞台芸術公演における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン (第一版)」を公開 (<https://jpasn.net/cn1/2020-07-01.html>)。

2021年9月16日、「舞台芸術に関わる団体、個人への支援」「舞台芸術に関わる、情報の収集と共有、必要な提言」などを通じて国内の舞台芸術活動の振興を図るための組織として、一般社団にて法人化 (正会員211団体、賛助会員35団体)。

<理事>

安孫子正 (日本演劇興行協会)	池田篤郎 (東宝) *	伊藤達哉 (ゴーチ・ブラザーズ)
井上正弘 (オフィス新音)	大島祐夫 (アート・ステージライティング・グループ)	加藤真規 (Bunkamura)
金井勇一郎 (金井大道具)	北牧裕幸 (キューブ)	北村明子 (シス・カンパニー)
小見太佳子 (アミューズ)	佐藤玄 (PARCO)	鈴木基之 (ホリプロ)
野田秀樹 (NODA・MAP) *	福井健策 (骨董通り法律事務所)	船越直人 (松竹)
松田誠 (ネルケプランニング)	宮城聡 (SPAC)	村田裕子 (梅田芸術劇場)
渡辺ミキ (ワタナベエンターテインメント)	吉田智誉樹 (劇団四季) *	

* 代表理事

<正会員>

アート・ステージライティング・グループ / Art&Arts / アートクリエイション / アートコア / アール・ユー・ビー / ACTOR'S TRIBE ZIPANG / 阿佐ヶ谷スパイダース / アタリ・パフォーマンス / アデランス / アトリエ・カオス / アミューズ / ALICE / M&Oplays / Antikame? / アントラクト / unrato / いがぐみ / イキウメ / 石井光三オフィス / イッセイプランニング / 一般社団法人エーシーオー沖縄 / 一般社団法人ココロエデュケーションラボ / イヤホンガイド / G-marc / イルミカ東京 / インターナショナルクリエイティブ / ヴォートル / 梅田芸術劇場 / 梅棒 / エアパワーサプライ / エイベックス・エンタテインメント / S-SIZE / エディスグローヴ / 江戸糸あやつり人形結城座 / オフィスプロジェクトM / 演劇ユニット鶴的 / エンジニア・ライティング / オーベロン / オールスタッフ / オサフネ製作所 / 大人計画 / オフィス300 / オフィス鹿 / オフィス新音 / 音楽座ミュージカル / オングストローム / KAAAT 神奈川芸術劇場 / 柿喰う客 / KAKUTA / 金井大道具 / カムカムミニキーナ / 鳥丸ストロークロック / 関西テレビ放送 / カンパニーデラシネラ / quina / 紀伊國屋ホール / 木ノ下歌舞伎 / 木下サーカス / CAT-A-TAC / キューブ / キョードーファクトリー / クオーレ / くちびるの会 / KUNIO / グループ色 / KHB 東日本放送 / 劇団 短距離男道ミサイル / 劇団あおきりみかん / 劇団あはひ / 劇団温泉ドラゴン / 劇団かかし座 / 演劇企画集団 THE・ガジラ / 劇団時間制作 / 劇団四季 / 劇団☆新感線 / 劇団スーパー・エキセントリック・シアター / 劇団青年団 / こまばアゴラ劇場 / 江原河畔劇場 / 劇団前進座 / 劇団だるめしあん / 劇団チャリT企画 / 劇団チョコレートケーキ / 劇団扉座 / 劇団B級遊撃隊 / 劇団BDP / 劇団ひまわり / 劇団ホチキス / 劇団山の手事情社 / 合同会社マームとジブシー / ゴーチ・ブラザーズ / こくみん共済 coop ホール / スペース・ゼロ / 骨董通り法律事務所 / こまつ座 / コマデン / コムレイド / コルテ / conSept / コンドルズ / ザ・スタッフ / サードステージ / 佐藤商事 / 彩の国さいたま芸術劇場 / SoundBusters / サクラサウンド / 三精テクノロジーズ / 山海塾 / サンケイホールブリーゼ / サンライズプロモーション大阪 / サンライズプロモーション東京 / シーエイティブロデュース / クリエイティブ・アート・スィンク / シー・コム / 美術工房拓人 / G-Rockets / ジェイズプロデュース / シス・カンパニー / 松竹 / 少年社中 / serial number / 新歌舞伎座 / StarMachineProject / stackpictures / STAGE DOCTOR / ステージワーク URAK / SPIRAL MOON / SPAC - 静岡県舞台芸術センター / スマイルステージ / 世田谷パブリックシアター / 全栄企画 / せんだい演劇工房10・BOX / タカハ劇団 / 宝塚歌劇 / TUFF STUFF / ダンスハウス黄金4422 / TBSテレビ / 寺田倉庫株式会社 / テルミック / 東映ビデオ / 東京ガーデンシアター / 東京グローブ座 / 東京芸術劇場 / 東京建物 Brillia HALL / あうるすぽっと / 東宝 / 東宝舞台 / ドナルカ・バックーン / トム・プロジェクト / TRASHMASTERS / トリックスターエンターテインメント株式会社 / 鳥の劇場 / ドワンゴ / ナイロン100° C / 中村 JAPAN.D.C / ナッポスユナイテッド / 日生劇場 / ニッポン放送 / ニ兎社 / ニューフェイズ / N.E.T ON / ネビュラエンタープライズ / ネルケプランニング / NODA・MAP / ハイウッド / 俳優座劇場 / Baobab / 博多座 / 博品館劇場 / はせがわ工房 / ハツピロコウ / PARCO / 範宙遊泳 / PRG / ファイブメディット / ファクター / FAB / Booster / FUKAIPRODUCE 羽衣 / フジテレビジョン / 舞台照明Aプロジェクト / precog / Project Nyx / Bunkamura / boxes Inc. / ポケットスクエア / 細野かつら店 / 坊っちゃん劇場 / ホリプロ / マーベラス / マイド / 水木英昭プロデュース / 御園座 / 魅知国定席花座 / ミックスゾーン / ミナモザ / みんなのしるし / 明治座 / 明治座舞台 / MONO / 山本能楽堂 / 遊戯空間 / 吉本興業株式会社 / 読売新聞東京本社 / ヨーロッパ企画 / ライティングカンパニーあかり組 / ラッパ屋 / リコモーション / RISU PRODUCE / RYU / 龍前正夫舞台照明研究所 / 熾光群 / Roots / LEGEND STAGE / 六本木トリコロールシアター / ロロ / ロングランプランニング / WOWOW / ワタナベエンターテインメント / 悪い芝居 / ワンツワークス

<賛助会員>

沖縄県芸能関連協議会劇場演出空間技術協会 / 劇場・音楽堂等連絡協議会 / 国際演劇協会日本センター / 国際児童青少年舞台芸術協会 日本センター / 国立劇場 / コンサートプロモーターズ協会 / ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク / 小劇場協議会 / 新国立劇場 / 全国公立文化施設協会 / 全国小劇場ネットワーク / 全国舞台テレビ照明事業協同組合 / 中劇場協議会 / 東京演劇大学連盟 / 日本演劇興行協会 / 日本演出者協会 / 日本音楽事業者協会 / 日本音楽制作者連盟 / 日本クラシック音楽事業者協会 / 日本芸能実演家団体協議会 / 日本劇作家協会 / 日本劇場技術者連盟 / 日本劇団協議会 / 日本ショー & パフォーマンス協会 / 日本照明家協会 / 日本太鼓財団 / 日本2.5次元ミュージカル協会 / 日本舞台音響家協会 / 日本舞台監督協会 / 日本舞台美術家協会 / 舞台映像協会 / 舞台芸術制作者オープンネットワーク / 文化芸術推進フォーラム / 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 / PARC - 国際舞台芸術交流センター

* 五十音順

* 正会員、賛助会員は2022年度会員を掲載

「日本の演劇」未来プロジェクト2022事務局

統括	伊藤達哉
チーフ	鈴木拓
事務局員	遠藤真有美 三坂恵美 日高和美 竹内桃子 片山知音 高橋舞 赤羽ひろみ 藤井良一 長谷川きなり

みらいジャーナル2022 編集チーム

編集	河野桃子
デザイン	三澤一弥
発行	一般社団法人緊急事態舞台芸術ネットワーク 東京都港区北青山3-6-7 青山パラシオタワー11階
発行日	2023年3月31日

※無断転載禁止

